

# 幼児と教師が共に主体となる保育 ～教師間のカンファレンスから考える～



## ご挨拶

本園では令和元年度から「幼児と教師が共に主体となる保育」という研究主題を掲げ、3年間研究に取り組んできました。幼児の主体性とは、自らやりたい遊びを見つけ意欲的に取り組むこと、教師の主体性とは、教師自身の保育に対する考えを意識しながら日々の保育を営むことと考え、教師と幼児が対話をしながら保育を進めることの重要性に着目し、教育課程の編成と指導計画の作成をしてきました。

このような取り組みによって導かれる保育の姿には、どこかに普遍的な正解があるというものではありません。本園の教員も3年目は副題を「教員間のカンファレンスから考える」とし、行事に対する取り組みにおいて幼児と教師はどのように主体となりうるかについて、特に「運動会」を対象として話し合いを重ねてきました。

この研究紀要にお目通しいただいた皆様から、是非ともご意見・ご感想を賜り、さらにカンファレンスの輪を広げ、より良い保育の実現と共有を目指していきたいと考えております。よろしくお願い申し上げます。

千葉大学教育学部附属幼稚園 園長 大和 政秀

幼稚園のゆかいな教員たち（プロフィールはカンファレンス実施時：2021年）

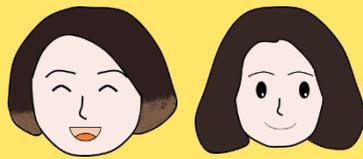


### 3歳児担任



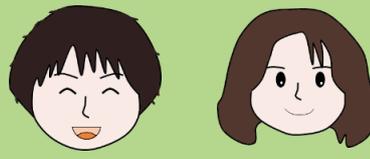
A：公立幼稚園を経て現職(20代)

### 4歳児担任



B：公立幼稚園で管理職経験あり(40代)  
C：大学卒業後本園に勤務(20代)

### 5歳児担任



D：公立幼稚園を経て現職(30代)  
E：公立幼稚園、養成校勤務を経て現職(40代)



### 養護教諭

F：2020年春に公立小学校から異動(40代)



### 副園長

G：2021年春に担任から副園長へ(50代)

本文中のカンファレンスには、主にこの7名が登場します

## 研究テーマについて

研究テーマ

### 幼児と教師が共に主体となる保育 ～教師間のカンファレンスから考える～

保育時間中は目の前の子どもたちに向き合うことに無我夢中になるこの仕事。子どもたちが帰ったあと、教師はようやく保育を振り返る時間をもつことができます。「明日の保育どうしよう」「いい考えが思い浮かばない」という日も多く、教師は自分の経験を紐解いてみたり、先輩や同僚の保育を参考に考えてみたり、保育の本をめくってみたりと様々な方法から明日の保育について考えます。保育に行き詰まりを感じた時、心の中のもやもやや引っ掛かりを言葉に出して伝え合う、いわゆるおしゃべりが答えを導いてくれることがあります。話すこと、伝え合うことを通して、教師は主体として明日の保育を考え、同時に幼児の主体がどうあるべきかを考えているのだと実感しています。

「幼児と教師が共に主体となる保育」。このテーマで3年目、私たちはより一層教師自らの在り様について考えるようになりました。

#### 主題「幼児と教師が主体となる保育」について

本園では、幼児が心ゆくまで遊び込むための時間や場の保障をし、幼児自身がやりたい遊びを見つけ、自ら取り組む「主体的」な姿を大切にしています。自らやりたいことに取り組むからこそ、心が動き、没頭して遊び込み、「もっと知りたい」「もっとうまくできるようになりたい」「やり遂げたい」と意欲的になります。その姿から、幼児の主体性は次の遊びへ向かう原動力となるものであることがわかります。

一方、教師の主体性とは、幼児に対して「こういう経験をしてほしい」「こうなってほしい」などの願いをもち、教育課程や指導計画を作成して、それらを意識しながら日々の保育を営むことです。教師は幼児と向き合うものとして主体性をもっていると言えます。

幼児の思いに流されるのではなく、教師が何もかも決めて主導するのでもない、教師も幼児も自由に発想し対話しながら、共に当事者、つまり主体となって生活を作り上げていくことが、私たちは「幼児と教師が共に主体となる保育」であると考えています。

#### 副題「教師間のカンファレンスから考える」について

このテーマにおいて1年目と2年目は副題を「対話的に進める保育の充実を目指して:教育課程の再編成」とし、教育課程を対話的な保育を前提としたものへ、長期指導計画を対話的な保育を後押しするものへと再編成しました。

研究の成果として、教師にも次のような考え方の変容がありました。教育課程や長期指導計画を最終的なねらいとして把握した上で、大きな視野をもってその日の保育を考えることができるようになったこと、実際の保育で、その日の幼児の姿や遊びに沿った臨機応変な対話的な保育が展開しやすくなり、幼児の思いや考えをより保育に反映できるようになったことです。

しかし、教師の主体が色濃く出る「行事」について遊びと同じようなことが言えるのか、と考え立ち止ま



りました。特に1年の中で大きな「運動会」という行事。幼児の主体が発揮されるようにと願いながら取り組んできたつもりではありましたが、果たして本当にそうなっているのだろうか？そこで、「運動会」そのものについて教師全員で改めて語り合う機会をもちました。

このことから、サブテーマを「教師間のカンファレンスから考える」とし、行事における「幼児と教師が共に主体」について検討しようということになりました。

## カンファレンスを通しての教師の変容

テーマではカンファレンスという言葉を使いました。カンファレンスと言うと協議を通して「結論を出す」「成果を導く」と考えがちです。

しかし、本園のカンファレンスは「保育は一人でなんとかできるものではないから（先生が一人でごんばってよい保育につながることはもちろんありますが）、いろいろな考え方を取り入れて自分なりに納得するところに向かう」という感じです。このようなカンファレンスなので、話はいつもざっくばらんに進みます。話し合いながら、それぞれの教師は、自分の保育を振り返り明日の子どもとの生活を考えます。カンファレンスを通して一人の教師、あるいは教師間でどんな変容が起こるのでしょうか。そしてその変容が、行事にどう影響するのでしょうか、そんなことに注目しながら研究を進めました。

## 研究の目的と方法

**研究の目的** 運動会という行事とそれまでの過程において、幼児と教師の主体がどう表れるのかを検討する

### 方法 ①運動会前

- ・運動会に対する教師の思いを出し合い、本園の運動会をどのような運動会にしたいのか考える。
- ・学年ごとに運動会への準備を進め、その過程を日の振り返りや週の振り返り、子ども個人のエピソードの形で記録する。また、教員間のやりとりも記録する。

### ②運動会后

- ・運動会の映像を教員皆で見てビデオカンファレンスを行う。

### ③事例検討

- ・カンファレンスを行った中で挙げられた学年全体の取組や個人の育ちを具体的に事例として取り上げ、今年の運動会が教師にとってどのような変容をもたらしたのか、幼児にとってどのような成長をもたらすものであったのかを検証する。
- ・運動会という行事の中で幼児と教師がどう主体を発揮しているのかを検討する。

## 運動会について、ざっくばらんに語り合おう

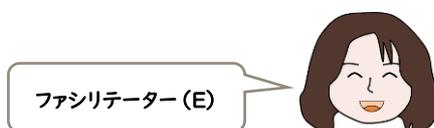
私たちは、これまで何度も「運動会」について話し合いをしてきました。ただしその話し合いは、運動会を実施する前提のもとで行われ、その上でその時々の子どもの姿に合わせた競技や種目の検討をするものでした。

私たちは、同じ園に勤務する幼稚園教諭と養護教諭の集団です。それぞれは幼少のころから高校生のころまで、別々の環境で運動会を経験してきています。また、教諭として勤務するようになってからもそれぞれの勤務先で経験したことは異なります。このカンファレンスでは、一人一人の教員が考える「運動会」について語り合い、これまでとこれからの運動会について考えます。題して、「運動会について、ざっくばらんに語り合おう！の会」。私たちの運動会に関するカンファレンスの、第1回目です。

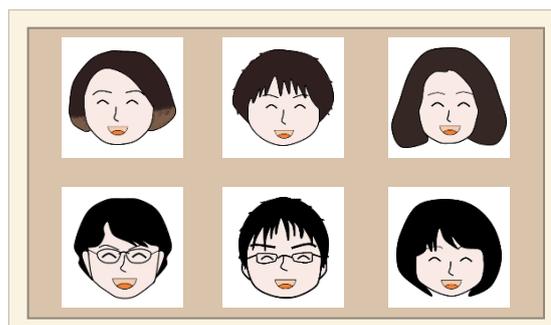
### 【日時】

2021年8月某日 10:00~12:30

オンラインにて実施



ファシリテーター(E)



### 運動会って何だろう

D: 大学卒業後公立幼稚園で勤め始めたけれど、「運動会って何?」と改めて考えたことはなく、それはすでにあるものだった。内容も、学年でやることは毎年決まったもので、運動会の時期から逆算して経験を積み重ねていくと考えて実践していた。園内研を進めていくうちに、運動会って何だろうと疑問に思うようになったけれど、それはこの数年の話だな。

G: うちの園(千葉大学教育学部附属幼稚園)は、私が勤め始めたころには、内容は年齢別にすべて決まっていた。5歳が風車を作って、3歳がそれを持って走る...というように、長らく保育者すら決められたことをやるという形の運動会だったの。だんだん、例えば年長は障害物競走をやるのだけれど、その中で何をやるのかは自由に考えよう、と少しずつ工夫の余地のようなものが出てきた。この10年くらいで主体としての保育者の「こうやってみたい」という思いが出せるようになり、この数年は子どもと対話をしながら作るという形になっているよ。

F: 養護教諭の立場からすると、運動会は正直怖い。みんなが見ている前だと、失敗を恐れたり勝利したかったりという気持ちから無理をしてしまい、ケガにつながりやすいからね。反面、みんながキラキラ輝いている姿を見るのは楽しくて感動がある。運動会が全員にとって楽しいものかということと違うかもしれないけれど、大勢で楽しむ経験って大事だと思う。そういう経験ができるのが運動会だと思う。

### 経験としての運動会

C: (2021年)7月の誕生会で4歳はかけっこをやった。これまでは誕生会の中などで、みんなで走ったり、年長が走っているところを見たりする経験ができたけれど、今年はなかった。その状況下でかけっこをしたら、自分の番じゃないのに笛の音で走り出してしまう子が続出した。運動会への取組に付随して、そういう経験(順番を待って合図に合わせて走るなど)ができると考えれば、運動会だけでなく生活にもいい影響があるとも思える。

B: 私みたいに運動が苦手な運動会好きじゃないよっていう子もいて、好きな子は好きな子なりに、苦手な子は苦手な子なりに取り組む中で、自分とは違う気持ちを持った子が気が付く。運動会は、自分とは違う気持ちを持った人が顕著にわかる行事だと思う。そういう経験も大切なのかも。



A: 仮に幼稚園で運動会をなしにしたとして、この先ずっと運動会がないことはない。幼稚園段階で必要かどうかは微妙だけれど、(運動会を経験することで) 今後の子どもの選択肢に運動会があらわれることは大きいことのように思える。

E: 運動会は、こちらから設定しなければ経験しえないもの。経験しておくことで今後、自分はこれが好きとか嫌いとか、選ぶことができるようになるのだと思う。そしてその活動が楽しければ、その先の人生の中でもそっちを選択しようってなるよね。だからその先の選択に影響を与えうる活動だなと思う。

## 運動会で、保護者に見てもらいたいもの

E: じゃあ、今年運動会をやるかやらないか決めようよ、って聞かれたらどう?

D: 今年、やる? やらない? って聞かれたら…悩むけれど…やりたいよね、やった方がいいんじゃないかとは思う。正直、運動会はあるものだという一般的な捉えられ方があり、保護者の思いもあるし、保育者としては子どもの育ちを見てもらえるいい機会として考えている。出来栄のいい運動会ということではなく、園が大事にしている方針を見てもらえる機会にはなる。

E: これまでの研究テーマでもある「物語」だね。運動会に向かうまでのストーリーを説明しながら、見てもらえる機会っているのが大事なことだよ。

B: 遊びを中心に保育をしていると、関わらないなら関わらないままで生活していける友達がクラスの中にと感じる。運動会はその子たちが関わる場になることもあるし、そういう姿を見てほしい。

C: どちらかと言えば「やる」。コロナという状況下だからということもあり私の中では運動会は親のためという気持ちもある。子どもの育ちを保護者が見る機会。運動会があることが家庭にもいい影響があるのかなと思う。

A: 時期・年齢・もち方などいろいろあると思うが、運動会はあるといいと思う。その中身をどれだけ柔軟にできるか、子どもと考えていけるかは園の実情によって変わってくると思うので、可能な限り子どもの日常に近づけつつ、非日常感も大切すればいいのかなと。

## 運動会は日常か、非日常か

E: A先生の発言の中にあっだけれど、運動会って日常なのかな、非日常なのかな?

D: これまでも運動会が日常におきたらいいよね、日常の姿が運動会に出るべきだよって理想があって、それを目指していたけれど難しいことが多かった。名目上は日常の遊びを運動会にもってきましたよと言いつつ、子どもの遊び、思いを運動会に向かせるように教師が力づくで引っ張っていくようなところがあったように思う。それは反省で、運動会はそもそも非日常だっていう自覚が必要だったかも。

A: 運動会って大きな行事で、年度当初からみんなの頭の中にある。生活から切り離されて浮いているというか…。運動会が目的そのものにならないようにはしたい。子どもの日常の中に運動会を落とし込んでいくと言っても、運動会是非日常に変わりはない。その非日常には楽しいとか苦しいとか、日常の中では感じられない感情を喚起させる働きがあり、それを子どもが味わうことに意味があるのでは。

E: 2020年の話なんだけど…。コロナの影響で6月スタートかつ分散保育で、私は持ち上がりではない年長の担任。子どもとの関係の構築に悩んでいたけれど、行事が助けてくれたことがかなりあった。運動会どうしようか? とか話し合いながら子どもと教師の距離が近づいたし、取り組みの中でうまくいったとか満足したとか、小さい自信が子どもに積みあげられていくことが、遊びそのものを引っぱり上げるような面もあった。非日常と日常は、それでもやっぱりつながっているとは思う。

G: 目指す幼児像や教育課程を考えたときに、どうねらいを達成させるのか。山の図(令和2年度紀要参照)で考えると、長期的な視点では、ねらい(山頂)に向かう方法の一つが運動会だと思う。でもみんなの話を聞いていると、山のてっぺんが運動会だなと感じる。そこに向かっていろいろなアプローチがあって、普段の遊びとは違う山なんだなと思う。

C: 運動「会」って名前がついているともう非日常。出席カードにキラキラシールを貼るっていうのはもう、非日常じゃないですか。特別感をシールでも出しちゃってる。

E: 保育者も煽ってるもんね、特別な日だよって。じゃあ運動会が非日常だと認めたくて、そこから何をもらえるのかを考えていけないといけないよね。高揚感、達成感、負けた悔しさ?そこで得られるものの価値を吟味していくことが大事かなって思う。

D: 何を体験させたいかっていう意識が大切ってことかな。

## それぞれの運動会から考える、これからの運動会

E: ところで、皆さん自身は「運動会」をどう考えているのかな。運動会、好きだった?

B: 私は、う〜ん。個人的には自分は運動会は好きじゃなかった。育ちを見てもらうのも、物語を説明するのも、別に運動会じゃなくてもいいんじゃないかな、という思いはある。

D: 私はすごい運動音痴で足が遅くて、緊張も強い方。でも運動会にはいい思い出しかなくて、応援などの楽しさとか、ドキドキするねって友達と共有したこととかが心に残っている。あと、踊ることが好きだった。踊っている時の気持ちよさ、高揚感が残っていて印象がいいんだと思う。走るの嫌だけど表現活動は好きだった。もしかしたら子どもたちも、個人の中の満足感みたいなものが満たされるといい印象が残るのかなと思う。

G: 私は運動会は嫌いだったけど、高校になってからの体育祭は楽しかった。実行委員になって、応援のダンスを考えたり衣装を自分たちで作ったりとかすると、行事の捉え方ががらりと変わった。それはやっぱり自分が考えたからなんだと思う。自分の考えが活かされたりとか。それまではやらされてる感があって、自分とは違うところに運動会というものが流れていて、大きな流れの中に自分がいなかったのかなと思う。主体かどうかっていうのか、流れの中に自分の居場所があるっていうのか、それが大事なかなって思った。

F: 私は運動会大好き。自分が参加するのは好きだった。運動会の取り組みを見ていると、真剣な表情とか見られて、オリンピックほどじゃないかもしれないけれど、一生懸命運動している姿を見るのは楽しいし、クラスだったりグループだったりと同じ目標に向かって、一つになって頑張れるっていうのが運動会なのかなって。だから楽しいんじゃないかなと思います。発表会もそうだけど、多くの人と、たくさんの人が見ている中で楽しい経験をするっていうのは、将来、大人になってからも運動をするとか、舞台上で何かを発表するとか、そういうのを楽しめる…楽しさを知れる機会なのかもと思っていて、人生100年って言われているし、小さいうちにそういう楽しさを知れるっていうのはいいことだなって思います。

E: 私自身は運動会が嫌いだった。楽しい記憶が本当になくて。叱られて叱られて、ちゃんと並びなさい、揃えて歩きなさい。走ったところで速くもないし。運動会が楽しい、楽しみって思ったことがない。だけど、だからこそ運動会が、体を動かすことって楽しい、上手にできるできない、速い速くないではないところで、みんなとやるのって楽しいねっていう経験になったらいいなと思っている。いやだなって思っている子とか、乗り気じゃない子もいる中で、雰囲気は楽しいねとか、これは今一つだったけどこれは楽しかったねとか。トータルでみたらなかなか良かったねくらいになればいいのかな。

A: 僕はむしろ運動会が好きだった。運動得意だったし、リレー選手に選ばれるとか徒競走1位とか。だけど何を覚えているかっていったら、だめだったことばかり。障害物走で倒れてる瓶を足で起こすのがなかなかできなくて、足が遅い人たちにどんどん抜かされたり、組体操で崩れたりとか。でもそれでもやってよかったなと思っていて、ネガティブなイメージがない。

E 先生は、ネガティブなイメージがあったからこそ、子どもにとっていい経験にしたいと言った。でも自分は、いや

なこともあったけれどポジティブに捉えている。それって何が違うんだろう。あとから振り返ってよかったなと思えること、いやだったなと思えることがあるのかな。運動会で得られるものも、即時のものだけでもないのでは。そういうのも考慮したい。

E: 取り組みのスタートの時点の印象が、A 先生は「わくわくして楽しい」私は「ドキドキして、なんか嫌」というイメージ。うまくいくイメージがもてないまま突入して行って、やっぱりうまくいかなかった! となるが多かった。

C: スタートの時点の気持ちってというのはそうだなと思う。私は運動会のイメージは A 先生に近くて、運動会楽しいって思っていた。全体の印象が悪いものではなかったのと、スタートの時点で面白がってたからなのかな。別に運動は得意じゃないけど、運動会は楽しいものというイメージがあった。どういうイメージをもっているかって大事なのかも。

G: 自分ごととして運動会を捉えているかどうかだろうね。D 先生の高揚感があったという話も、ダンスを自分のものとして取り入れて踊っていて、やらされてるんじゃないんだよね。3 歳もそうなのね。先生たちのもっていき方が、こういう風にやりなさいではない。子どもがどんな風楽しめるかを考えているから、子どもたちの中で楽しいものになって、運動会が自分ごとになっていくんだと思う。

E: スタートがなるべくポジティブな印象だといいなという部分と、終わりがポジティブだといいなということ。そのポジティブさって、勝って満足だけではない。だってクラス対抗リレーは、どちらか一方は負けてしまう。子どもたちは、当日負けたとしても「リレーなんてやらなきゃよかった。運動会サイテー」とはならない。負けちゃったけど頑張ったよねとか、応援してもらって嬉しかった、応援するのが楽しかった、それまでの過程の中で勝ったり負けたりしているから今日もその途中だ、とかいろんな思いをもつようになる。そういう心を育てていきたいよね。



### \*カンファレンスを終えて\*

私たちは日々、子どもの育ち等について話し合っていますが、今回のように自身の経験も交えて話をする機会はそう多くはありません。教職員同士が何でも開示し合う必要はないかもしれませんが、今回のように一つの行事に対する教員一人一人の経験と、それに伴った多様な感情や考えを聞き合うことは、多様な子どもたちを理解することの助けになるだろうと改めて感じました。

このカンファレンスは夏季休業中であつたため、在宅で参加できるよう Zoom を利用しました。この方法のメリットとして、録画が容易であり繰り返し協議の内容を確認できること、Zoom では複数名が同時に発言することが難しく自然と発言者の話をしっかり聞き、それを受けて次の人が発言するようになるため、一人一人がしっかり発言する機会が用意できることが挙げられます。その反面、対面での協議に比べると、話しのスピード感は劣るかもしれません。各々の発言を温かく受け止める受容的な雰囲気の中、メンバーの発言を促したり、話の流れをまとめたりするファシリテーター役がいると、話し合いはスムーズに進みます。

カンファレンスというと、実のある話をしなければ、何らかの結論を出さなければと身構えがちですが、自分たちの経験や思いを自由に語り合う中にも、新たな視点を得る、新たな考えを生み出す、当たり前と考えてきたことを言語化し自覚する、というような機会は多くあります。今回であれば、運動会という行事に向けた一連の取組の始まりと終わりはなるべくポジティブな感情にしたいという話題からは、運動会そのものを成功に導きたいというだけでなく、その先もずっと続いていく子どもたちの生活の中での選択肢を増やすことや、生活そのものが豊かになることを願う教師の思いを確認することができました。

(田中幸)

## 運動会ってなんだろうね 3歳児事例

### 運動会で期待する育ちの姿から

夏休み期間中の教師間のカンファレンスにおいて、3歳児では次のような話題があがった。



3歳ではとにかく「みんなでやるって楽しい、体を動かすって楽しい」を経験してほしいよね。

もしかすると、「みんなで楽しい」よりもさらに前段階の「みんなでやるのもいいかも」程度なのかもしれないです。



まず「運動会」という行事自体をはじめて経験する幼児も多くいることから、先生や友達とみんなで一緒に体を動かすことの楽しさを感じてほしいという思いが挙げられた。「運動会」が何であるか明確な自覚はなくとも、運動会に向けた活動を通して「みんなで何かすること」に対する楽しい経験の積み重ねが3歳児では重要であることを共有した。また、運動会が学年別開催になったことによる影響についても話題になった。



「運動会」ってものが何か分からないまま、自分たちの番まで客席で長時間待つより、学年別開催のほうが3歳児には良いのかもしれないですね。

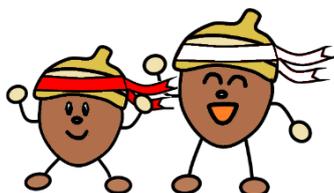
でも、他学年の踊りを見て思わず踊り出すような姿もあったよね。



保護者も自分の子どもだけでなく、他学年の子どもたちを見て成長を感じる機会になっていた部分も大きいように感じます。

短時間で終わり自分たちの競技に集中できるため負担が少ないメリットが挙げられた一方で、以前は他学年の取組を見て自然に体を動かしたり他学年の幼児と関わったりする姿が見られ、他学年の取組を見ることの良さがあったことも挙げられた。

これらのカンファレンスを受け、今年度の運動会を考えていくこととした。



## 長期指導計画から

長期指導計画 3歳Ⅲ期(9月～10月上旬) ※一部抜粋

	うごく	かんじる	かんがえる
ねらい	のびのびと体を動かすことを楽しむ	教師や友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じる	教師に自分の思いを表そうとする
保育者の援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 休み明けはⅡ期にしていた遊びを思い出し自分なりにしてみようとする姿や、夏休みに経験したことを遊びに取り入れてみようとする姿を大切に作る。</li> <li>○ 体を動かして遊ぶ楽しさを感じられるように、保育者も積極的に体を動かして遊びを盛り上げ、楽しい雰囲気を作っていく。</li> <li>● 他学年のリレーやリズムなどを関心をもって見たり、一緒に参加したりできるようにして遊びの中から無理なく運動会につながっていくようにする。</li> <li>○ 運動会後も他学年がやっていたリズムを覚えてもらったり、運動会ごっこなどをしたりして楽しめるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Ⅱ期を思い出しながら遊び出せるような環境を作ったり、幼児が友達とかかわれるような遊びや場の設定をしたりする。</li> <li>○ 友達と一緒に遊ぶきっかけ作りをしたり、一緒に過ごす楽しさが感じられるような雰囲気作りをしたりしていく。</li> <li>○ 幼児が遊びの楽しさを感じ、また遊びたいと思えるように、保育者は遊びの中で雰囲気やイメージをふくらませる声掛けをしていく。</li> <li>○ 遊びの中で、周りの友達に関心をもったりかわろうとするきっかけをもったりできるように配慮をしていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 遊びや生活の中で安心して自分の思いを表せるよう、保育者がゆっくり耳を傾けて話を聞き、気持ちを受け止めていく。</li> <li>● Ⅱ期と室内の環境設定が大きく異なるため、幼児が安心して過ごせるように一人一人とじっくり関わるなどしていく。</li> <li>○ 幼児が遊ぶ姿を見守り、必要に応じて遊びのきっかけになるものを作ったりアイデアを出したりする。</li> </ul>

3歳児Ⅲ期(9月～10月上旬)のねらいは、上記の通りである。

運動会にかかるであろうと考えられる保育者の援助・環境構成としては、以下のものが挙げられる。

- ・「体を動かして遊ぶ楽しさを感じられるように、保育者も積極的に体を動かして遊びを盛り上げ、楽しい雰囲気を作っていく」(うごく)
- ・「他学年のリレーやリズムなどを関心をもって見たり、一緒に参加できるようにしたりして、遊びの中から無理なく運動会につながっていくようにする」(うごく)
- ・「幼児が遊びの楽しさを感じ、また遊びたいと思えるように、保育者は遊びの中で雰囲気やイメージをふくらませる声掛けをしていく」(かんじる)

## 短期指導計画から

3歳児ではそれまでの生育状況の違いによって、『運動会』というものに対する認識に個人差が大きい。無論、単純に運動会というものを知っているか否かということもあるが、知っている子の中でも『知っている』レベルに差がある。例えば知識として知っているのか、体験として知っているのか。運動会を題材にした絵本などを見たことがあり知っているのか、それともきょうだいの運動会を見たことがあるから知っているのか(この場合は知識と体験の中間とも言えるかもしれない)。体験として知っている場合でも、ほとんどは保育所など入園前の集団経験の場でのものと考えられるが、それも園や施設によって運動会の規模・種目・実施場所(屋内・戸外)などの違いがあるだろう。

したがって、3歳児では前提として運動会というものの共通認識がほとんどないと言える。そのため、運動会への取り組みの導入として教師が安易に「運動会があるよ!」などと投げかけてしまうのは果たしてどうなのか…? と思い、遊びなどから自然な形で運動会に入ることができるようにしていこうと計画を考えるようにした。



担任

「運動会」という言葉については、こちらからはあえて触れることはあんまりしないで、ギリギリまでとっておこうかなあ、と考えてます。運動会に向けた活動も早くやり過ぎてしまうと飽きてしまうので2週間くらいから少しずつやろうと思いますけどどうでしょう?

そうですね、それでいいと思います。きっと子どもからそのうち「運動会」って出ますよね。それまでの間に、身に着ける物とか競技で使う物とかを用意していきましょう!



副担任



何か運動会のテーマがあるといいですね…ダンスの曲からテーマにしようかな…

次ページから、運動会までの1ヶ月における短期指導計画(週案)のねらい・内容および保育者の援助について抜粋したものを示しながら、教師の思いを中心に実践内容を簡単にまとめる。

9月2週

運動会まであと5週！

ねらい	○園生活を思い出しながら元気に登園し過ごす	内容	・園生活の流れを思い出しながら、教師と一緒に安心して過ごす
-----	-----------------------	----	-------------------------------

夏休みの長期休暇明け、なによりもまずは幼稚園で安定して過ごせるようにということを第一に援助を行う。幸い、登園時に泣いたり不安になったりするような姿はほとんど見られず、1学期に取り組んでいた遊び（ミミズ探し、砂遊び、三輪車などの乗り物遊び…など）を中心に過ごす。運動会の『う』の字も出さずに、子どもととにかく遊びながら過ごすようにした。そうした中でも、降園時の活動の際には1学期に取り組んできたリズム遊びや踊りを入れるなどして、やや運動会へつながることも意識はしていた。



9月3週

運動会まであと4週！

ねらい	○教師や友達と一緒に体を動かして遊ぶ	内容	・ダンスやかけっこなど、体を動かす遊びに参加する
○保育者の援助	(運動会に向けて) ○他学年の取り組みを見たり、好きな遊びの中でリズム遊びやかけっこを取り入れたりして、体を動かすことに親しんだり楽しんだりできるようにしていく。		



遊びの中で簡単な追いかけてっこをしたり、片付け時に部屋に戻る際に子どもから競走しようと言われたのを周囲に広め、みんなでかけっこをしたりなど、ちょこちょこ週のねらいに沿った活動のようなものを取り入れてみる。引き続き降園活動等では、1学期に楽しんできたダンスを実習生にも共有しながら行う。

年長が園庭で運動会に向けた取り組みを始めたことで、その様子を目にする機会が増えてきた。子どもたちも気付いて、ベンチに座って見たり「何してるの?」と教師に尋ねたりなどする。こちらからは「何だろうね?」「楽しそうだね」と話すに留め、一緒にじっくり見たり応援したりして楽しい雰囲気が感じられるようにした。



運動会のテーマは、ダンスの題材がサルなのでそれを主軸にしようと思うのですが…

わあ、楽しそう！ そうするとバナナとかリンゴとか、果物の要素も入れられそうですね！



副担任と相談をしながら運動会で行なう競技の細部を詰め、今年は『サル』のイメージで競技を行なうことにした。競技は、ダンス・玉入れ・親子競技・親子ダンスの4つ。

9月4週

運動会まであと3週!

ねらい	○好きな遊びを見つけ喜んで取り組む	内容	・ダンスやかけっこなどの体を動かす遊びを楽しむ
○保育者の援助	<p>○●教師と一緒に走ったり力いっぱい走る姿を認めたり励ましたりすることで、走る気持ち良さや競う楽しさを感じられるようにする。他学年と混合で遊んでいる場合には、人数や遊びの様子に応じて場を分けるなど、それぞれの年齢にあった楽しみ方ができるよう配慮していく。 (運動会に向けて)</p> <p>○降園前の時間にダンスを踊ったりかけっこをしたりなど、みんなで同じことに取り組んだり、体を動かしたりすることを楽しみながら、少しずつ雰囲気を感じることができるようになる。</p>		

今週になって初めて運動会で踊る(予定でいる)ダンスをクラスで行う。この時点で運動会の話はしておらず、あくまで普段行っているリズム遊びの一つとして取り組む。子どもの反応は悪くなく、サルの動きをイメージした振り付けを笑いながら行なったり、左右に動くのを喜んだりしている。この週は2回ほど踊った。3歳児ではやりすぎても飽きてしまうし、振りの出来栄をを求めるわけでもないで、今は「このダンス楽しいな」と感じられる程度になるよう留意しながら取り組む。



ダンス、楽しそうに取り組んでいてよかった…! サルをイメージした振りも多いので、嫌な子もいるかなとドキドキでしたが、一安心しました。その他の競技は…直前までまだ取り組まないでおうと思います。

動いてない子もいなかったですすね! うん、まだ玉入れとかはやらなくてもいいと思います。



子どもたちの実態を基に、運動会に向けた取り組みを始めるタイミングについても相談・確認をし、ダンス以外の取り組みはまだ行わないこととした。

9月5週/10月1週

運動会まであと2週!

ねらい	○好きな遊びを見つけ喜んで取り組む	内容	・ダンスやかけっこなどの体を動かす遊びを楽しむ ・教師や同じ場にいる友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じる
○保育者の援助	<p>○●園庭で他学年の練習を見る機会も増え、幼稚園の雰囲気がだんだんと運動会に向かっていく。子どもたちと体を動かして遊ぶ機会を増やしながら、徐々にみんなで体を動かして遊ぶことの心地よさが感じられるようにする。 (運動会に向けて)</p> <p>○降園前の時間にダンスを踊ったりかけっこをしたりなど、みんなで同じことに取り組んだり、体を動かしたりすることを楽しみながら、少しずつ雰囲気を感じることができるようになる。</p>		

まだ運動会の話は投げ掛けない。年中児が行っていたどんぐりを使ったマラカス作りに惹かれ、3歳児も園庭のステージに集う。年中児に混ざって楽器を振りながら踊ったり、自分たちだけで集まって踊ったりして楽しんでいた。遊びの中で「友達と・みんなと」という雰囲気が出てきていて、よしよしと思う。

この頃から年長児の取り組みを目にする機会も増え、子どもからも「運動会」という言葉が聞かれるようになってくる。それでもまだ気付いていない子が大半だったので、聞いてきた子に少しずつ「運動会かー」「運動会だって、楽しそうだね!」と言うようにして、自然に話が入っていくように下地(?)を整えるようにした。来週の初めに全体に運動会の話をすることを決める。



ねらい	○体を動かすことを楽しむ		内容	・教師や友達と一緒に走ったり踊ったりする ・運動会に喜んで参加する		
○保育者の援助	○教師も一緒に体を動かして遊びながら、様々な動きを楽しんだり挑戦したりする姿に共感したり認め励ましたりすることで、体を動かす楽しさや気持ち良さを感じられるようにする。 (運動会に向けて) ○降園前の時間にダンスを踊ったりかけっこをしたりなど、みんなで同じことに取り組んだり、体を動かしたりすることを楽しみながら、少しずつ雰囲気を感じることができるようになる。 ・ダンス…戸外で踊る雰囲気に慣れることができるように、さくらんぼ広場(実際に運動会で踊る場所)で踊ってみる。 ・玉入れ…他学年との兼ね合いによっては室内でも何度か行い、楽しい雰囲気で行えるようにする。					
日の活動	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
	ダンス(室内) 運動会の話をする	玉入れ(室内)	ダンス(園庭) 衣装の耳を付ける	玉入れ(園庭)	ダンス(園庭)	運動会当日！

月曜日、弁当前の遊びの時間に3歳児がかけっこをしていると年長が「入れて！」と加わってくる。どんどん人数が増えてきたので、その流れでリレーを行う。年中児もいて、全学年が混ざって盛り上がっていい雰囲気。弁当後には年長児が取り組んでいた玉入れに数名の3歳児も飛び入り参加。今日がタイミングだな…と感じ、運動会について子どもに投げかけることを改めて決意する。

降園活動時にサルのダンスを踊る。その後、「最近年長さんがいろいろやってるの知ってる？」と投げかけると、「見た！リレーしてた！」「運動会でしょ!？」と反応が返ってくる。それを受けて、「そうそう、そうなんだよ。今日一緒にかけっこことかリレーしたり、玉入れを一緒にしたりした人もいたよね。実は今度ね、運動会っていうのがあって…」と話し始めると、「知ってる!」「○○保育園でやった!」「かけっこやるんでしょ!？」と『運動会知っている組』の子どもたちが声を張り上げ、『運動会知らない組』の子たちはきょとんとする。「花組さんでも運動会をやりたいなって思って、楽しいこと考えてるから、みんなも楽しみにしててね!」と話をまとめ、降園をした。

初回の玉入れはとにかくカゴに玉を入れる遊びとして行った。意欲が高く子どもたちは大喜びで取り組み、終わった後には「またやる?」と声上がるほどだった。

ダンスでは「今日は外で踊ってみよう!」という教師の投げ掛けに、一斉に飛び出していこうとする子どもたち(サルだけに、ウキウキした様子)。サルの耳を付けることを嫌がる様子もなく、楽しんで取り組むことができた。

運動会の前日には「明日はおうちの人とやるのもあるんだよ」と親子競技や親子ダンスの話をする。「えー…!」と嬉し恥ずかしな反応をする子どもたち。親子競技・親子ダンスについては親も子ども当日の楽しみになるように、事前の練習はしないことにしていた。



よしよし、それぞれの競技に喜んで取り組んでる!  
モチベーション高く帰っていったので、このまま明日も楽しく行えるといいな。

そして運動会当日。保育室まで走って登園してくる子が多く、普段保護者と一緒に部屋にくる子まで一人でやってくる。張り切ったり嬉しそうにしたりする様子が見られ、あまり教師側から運動会を殊更取り上げて話をしてこなかったが3歳児なりに楽しみにしていたのだなと感じた。初めての大きな行事を保護者とともに参加しながら、3歳児なりに満足感をもって終えることが出来たように思えた。



## 運動会後のカンファレンスから

### 『なりきる』って大事!

- E: 私これ、入場の時からおサルさんで出てくればよかったんじゃないかなってすごい思うんだよね。  
A: 踊るときは私もサルの耳付けましたけど、確かに初めから付けた方がよかったですね。  
D: みんなでサルになりきって出てくるみたいなの。  
E: そうそう、ダンスもおサルさんだし耳付けてるし…まあ先生がおサルになる必要はないかもしれないけど。笑  
G: 私はアナウンスでもう「おサルさんたち」って呼び掛けちゃってた!  
D: この時期に『なりきる』って経験がたくさんできるといいんですかね。  
E: だからやっぱり、入場からサルで来た方がいいのかも。「もう今日はサル☆」みたいなの!

### 運動会の内容をどう考えていくか?

- A: 3歳児の運動会の『テンプレート』じゃないですけど、例年やっているものの中から今年はどうするか?を考えてしまうので…。でも、その中にはないもの考えるのも、3歳児でも必要なのかもしれないなって思いました。  
E: 年長は毎年全然違うもんね。  
D: 3歳児だと『子どもの声を聞きながら』は難しいのかなとも思うので、子どもの姿や様子から教師が考えていくって感じかな?  
B: でもその場合、気を付けないとすごく高度なことをやってしまう可能性もあるから、そこは学年の違いとか成長が見えるようによく話し合っただけの必要はあるよね。学年別開催だとなおさらかも。

2021. 10. 15 ビデオカンファレンスより

運動会の中ではダンスを軸にし、一貫して『サル』のイメージを子どもたちと共有しながら活動を進めていった。ビデオカンファレンスでは「入場時からサルになりきって入ってくるとイメージをもっと楽しめたのではないか」という意見をもらった。

教師自身、ごっこ遊びなどのイメージのある遊びの援助が苦手であるという自覚があったが、カンファレンスを通してそれを一層自覚させられた。子どもから出てくるイメージを受け、教師も同様になりきったり一緒に動いたりする援助が特に3歳児には大切であることを改めて感じ、カンファレンス以降はより意識的に行うようになった。

## まとめ

今回、運動会の取り組みを通して3歳児クラスにおける「幼児と教師が共に主体」「対話的な保育」について考えてきた。運動会は3歳児にとって入園後初めての大きな行事であったが、「運動会」という単語はクラスの中では直前まで意図的に出さないようにして援助を行ってきた。

そもそも、まだ「行事」という感覚や「運動会」というものに対するイメージがあまりない3歳児には、自ら主体的に運動会への取り組みを始めることは難しい。そのため、教師はダンスの曲から『サル』のイメージを提案して活動をつなげたり、遊びの一つとして玉入れを行うことで教師や友達と一緒に遊ぶこと(=運動会の取組に参加すること)が楽しめるようにしたりした。そうすることで、次第に子どもが一つの取組に主体的に参加できるようにしていった。

カンファレンスでも話題に上がったように、正直に言って3歳児と対話的に何かを決めたり作ったりすることは難しく感じる。それは、子ども自身が自分の思いや考えを十分に言葉に表すことができないことも多いためである。したがって、3歳児との対話的な保育の営みは、子どもの言葉や声に耳を傾けたり意見を交わしたりというものよりも、子どもの姿や動きを教師が受け止め、その裏にある思いを読み取り、教師から提案をしたり投げかけたりして遊びや行事を作っていくことが主になるのではないだろうか。ここでは、教師の主体が発揮されやすいと言える。だからこそ、教師は子どもの姿の読み取りが適切であるかどうか、子どもの姿を一人で解釈するのではなく、他の教師や保護者と共有しながら多様な解釈を行っていく姿勢が求められる。

子どもの主体を受け止め、教師が主体を発揮して子どもとの遊びや行事を作っていく、この積み重ねがその後の子どもの『対話』の素地となっていくのではないだろうか。(斎藤晶海)

## 4 歳児 運動会に向けた取り組み

本園の4歳児学級は、2年保育と3年保育の混合学級である。4歳児では、3歳児と同様に先生や友達とみんなで一緒に体を動かすことの楽しさを感じてほしいという思いがあった。加えて、例年4歳児からクラス対抗競技を行っており、学年全体の動きが意識されていた。また、参観する保護者に子どもの成長を感じて欲しいという思いもあった。

### 4歳児で経験してほしいこと ～2021年9月3日の園内研修～



4歳になると、例えばダンスとかで「大きく動こうね」「こうするとかっこいいよ」とか、見栄えを意識した声掛けをすることが増える気がする。



3歳とは違って隊形移動もして、個人個人がちゃんと見えるかって、見ている側の保護者のこともより意識しているかも…。



例年4歳では玉入れをやっているけど、4歳は個人ではなくチームとしての勝敗がわかってくる時期のような気がする。4歳はちょうど個人と集団の中間だね。



自分の投げた玉がかごに入ったかどうかとか、個人の結果は関係なくチームとしての勝ちを喜べるのが4歳だね!



「勝敗がどっちに転がるかわからない」「次は勝てるかもしれない」と考えられるのは団体競技だからこそですね。活動を通してリベンジもできるし!



負けた悔しさとか勝った喜びとか、いろんな感情を経験できますよね。

園内研修では、「幼児が勝敗を経験すること」と「保護者が見ること」の2点が話題になった。ここでは、長期指導計画・短期指導計画について振り返り、4競技のうち学年ダンスに焦点を当てて事例を検討する。

### 【4歳児Ⅲ期 長期指導計画】

4歳児の運動会では、主に幼児が体を動かすことは心地よく楽しいものであると感じられるように計画した。

「体を動かす心地よさを味わう」、「友達や先生と一緒にのびのびと体を動かすことを楽しむ」、「親子でふれあい、楽しい時間を過ごす」の3点をねらいとし、運動会に関する教師の援助と環境構成は、長期指導計画の下部にある黄色枠内に記載した。

長期指導計画 4歳Ⅲ期(9月～10月上旬)

	うごく	かんじる	かんがえる
幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>夏休み明けで生活リズムが戻らなかつたり、暑さで調子が出なかつたりする。</li> <li>いろいろな遊びに興味をもって自分から取り組む姿が見られる。</li> <li>夏休み中に行っていたこと、幼稚園でもやってみようとする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>久しぶりの幼稚園生活で、緊張したり不安になったりする。</li> <li>夏休み明けで、友達や先生と遊んだり話したりすることを楽しみにして食事を待つ姿が見られる。</li> <li>夏の終わりが秋の自然に興味をもって関わる姿が見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1学期の生活を思い出し、自分でできることは自分でしようとする。</li> <li>思ったことや考えたことを自分なりに表現しようとする。</li> <li>自分の思いを教師や友達に言葉で伝えようとする。</li> <li>気の合う友達と過ごす時間が増える一方で、友達と意見が合わなかつたり思いが伝わらなかつたりする場面も増えてくる。</li> </ul>
ねらい	みんなと一緒に体を動かして遊ぶことを楽しむ	自分なりの表現をしながら、気の合う友達と一緒にイメージのある遊びを楽しむ	気の合う友達に自分の思いや考えを伝えようとする
教師の援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>夏休み明けは1学期の遊びを思い出しながら、自ら遊び出した友達と関わりがもてたりするように、どんぐり広場に様々なコーナーを用意する。M2</li> <li>簡単なルールのある遊びを通して、友達と一緒に動いたり遊んだりする楽しさが味わえるようにしていく。M1</li> <li>自ら取り組もうとする意欲や一生懸命取り組む姿を認め、自信がもてるようにする。M2</li> <li>ゆめのしろをはじめとした挑戦する道具に取り組む、自分なりのあての達成に向かっていく姿を見守る。M2,M3</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1学期から慣れ親しんだ遊具や用具、材料を用意し、自分の好きな遊びを見つけ、表現しながら安定して過ごせるようにする。F2</li> <li>水を使った砂遊びや泥遊び、泡遊びなどをのびのびと楽しめ、その感触を味わえるようにする。F2</li> <li>夏の終わりが秋にかけての園庭の自然に触れて、様々な発見や喜びにつながるようにする。F1</li> <li>子どもの発見を受け止め、興味をもった遊びが広がったり友達と共有したりできるようにする。F3,F4</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>一人一人の発想やイメージを受け止め、実現できるような環境や材料等を用意する。T2</li> <li>友達と意見を出し合いながら遊びを進められるよう、教師も遊びに入り、同じ遊びに繰り返し取り組んで満足感をもてるようにする。T1,T2,T3</li> <li>友達と思いが合わない場面では、自分の思いを教師に伝えられるように、丁寧に聞いていく。そして、繰り返しをしながら相手の気持ちに気付いていくようにする。T2,T3</li> </ul>
環境構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>体を動かして遊べる環境を整えたり用具を用意したりして運動会への期待を高めていく。M</li> <li>5歳児がリレーやリズムに取り組む姿を見て、一緒にやりたいと思う気持ちを育てていく。M</li> <li>運動会に向けた取り組みを積み重ねる中で、自分なりの思いや考えをもって表しめるようにする。T</li> <li>一人一人の思いや期待を受け止め、クラスや学年の友達と一緒に体を動かして表現することを心地よく感じられるようにする。F</li> <li>うれしい気持ちや悔しい気持ちなどを味わいながら、いろいろな競技に意欲的に取り組めるようにする。F</li> </ul>		

## 今年の競技、どうする？

長期指導計画と2020年度の運動会の競技内容を踏まえ、まず2021年度の4歳児の競技を決めた。学年別開催で時間が限られるため、競技数は2020年と同様の個人競技：障害物かけっこ、学年ダンス、親子競技：玉入れ、親子ダンスの4競技とした。例年、4歳児では団体競技としてクラス対抗の玉入れが行われていたが、2020年度はコロナウイルスの影響で玉入れがなかったため、この「玉入れ」の経験をめぐり、2021年度の親子競技の内容をどうするか話し合った。



雪組担任 C

去年、団体競技の玉入れがなかったのはなんでだったんですか？

運動会全体の時間を短くするためだね。全体的に早く終われる内容にしたの。

団体競技の玉入れはなくなりましたが、親子競技で玉入れなら、勝敗も経験できるし、すぐ終われそうな気がしますね。

去年は親子競技でオセロゲームをしたけど、芝生の上でカードをめくるから、見てる側は勝敗が分かりにくかったんだよね…。

玉入れを団体競技で実施することにして、障害物かけっこを親子競技にする方法もあるけど、障害物かけっこは「うちの子走ってる」って個人の様子をよく見られるし、はずせない競技ですよえ…。

親子競技で玉入れをして、勝った負けたを感じられる方が面白いかもね。



星組担任 B

教師の援助には「うれしい気持ちや悔しい気持ちなどを味わいながら、いろいろな競技に意欲的に取り組めるようにする」とある。喜びや悔しさを感じる、勝敗のある競技を経験できるよう、親子競技に取り入れることにした。親子競技以外の3競技は、「体を動かす心地よさを味わう」等のねらいを踏まえて例年と同じ競技とし、具体的な内容や題材は2021年度の幼児の興味・関心に沿って検討することにした。

### 親子玉入れ — やっぱり勝ちたい！ —

E：玉入れはお父さんの参加が多かったね。

C：うちのクラス、練習ずっと負けていて。クラスで、「背が高いからお父さんにしてもらおう」って言った子がいたの。それが影響しているのもあるのかも。

B：うちのクラスは、家で「どっちが玉入れ上手か聞いた」っていう子がいたよ。

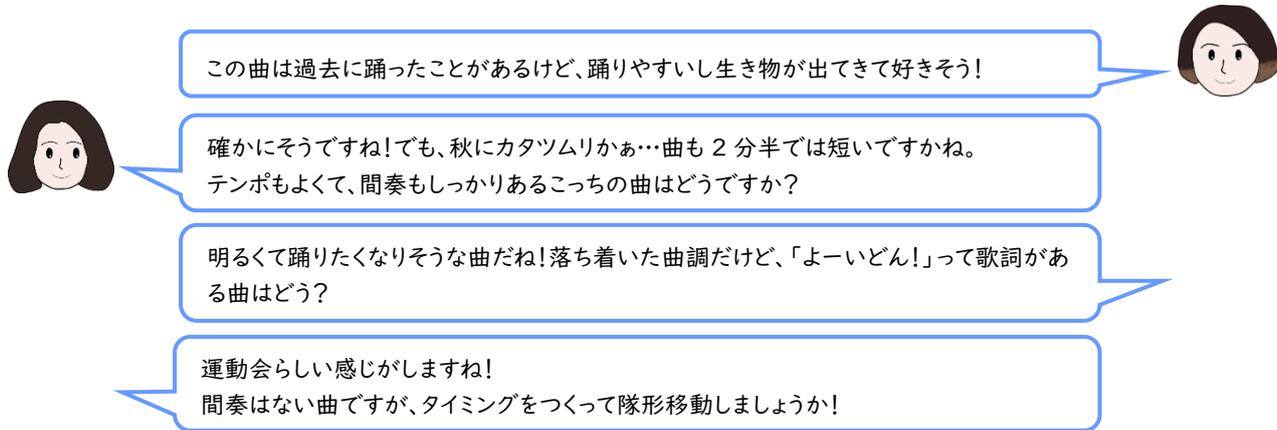
E：すごいよね。勝ちたくて、色々考えてるんだもんね。4歳児なりに思いをもってやってるんだよね。

2021.10.20 ビデオカンファレンスより



## 学年ダンスの曲、何にしよう？

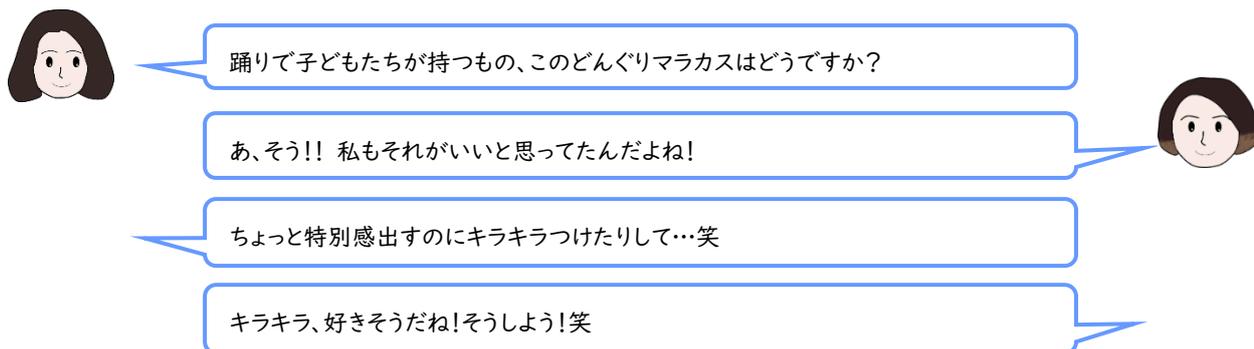
競技の検討を終え、ダンスの曲を決めた。2021年度の4歳児は、Ⅱ期からⅢ期にかけて虫に関心をもつ幼児が多かったため、生き物にまつわる曲や、性別に関わらず体を動かしたくなるような曲調の曲を数曲候補に挙げ、教師間で話し合っただけで決めた。



学年ダンスの曲決めでは、「体を動かす心地よさを味わう」等のねらいを念頭に、子どもたちが思わず体を動かしたくなるようなテンポの良い曲かどうか、2021年度の幼児の興味・関心に沿っているかどうか、振りつけや隊形移動も念頭に、曲の速さや間奏の有無も話題とし、曲に対する保護者の印象も考慮の上で決めた。4歳児の運動会で行う競技やダンスの曲決めは、5歳児とは異なり保育者が決めている。幼児は教師が決めた曲を踊ることになるが、だからこそ幼児が「やってみたい!」、「楽しい!」と思える内容となるよう、学年ダンスで子どもたちが身に付けるものも幼児の意欲が高まるようなものにするようにした。

## どんぐりマラカスにしない?

後日、学年ダンスの踊りの際に子どもたちが身に付けるものについて話題になった。朝の保育準備の時間のささいなやりとりである。



Ⅲ期長期指導計画の「かんじる」の環境構成(●)には、「夏の終わりから秋にかけての園庭の自然に触れて、様々な発見や喜びにつながるようにする」とある。Ⅲ期は園庭にマテバシイが豊富に落ち始めている時期であったため、4歳児保育室に近い戸外ステージ付近には、プラスチック容器にマテバシイを入れたマラカスなどの楽器づくりができるコーナーを設置した。しかし、自由遊びの中で関心をもった幼児のみが作ったり遊んだりしていたため、運動会をきっかけに身近な素材や自然物を使って1人1つ「どんぐりマラカス」を作り、作ったものを使って踊る経験ができると良いのではないかと担任たちは共通の意識をもっていた。このように、運動会前までの保育の流れも運動会の内容に活かしていった。

## 【4歳児 10月第2週 短期指導計画】

2021年度の4歳児では、9月第5週/10月第1週から週案のねらいに「運動会」に関する記述を入れた。運動会に向けた活動は10月第2週から本格的に行われ、ねらいは「運動会に期待をもち楽しく活動する」、内容は「体をのびのび動かして遊んだり、競技やダンスに参加したりする」と「みんなで一緒に活動することの楽しさを味わう」とした。

園目標 取組	うごく みんなと一緒に体を動かして遊ぶことを楽しむ	かんじる 自分なりの表現をしながら、気の合う友達とイメージのある遊びを楽しむ	かんがえる 気の合う友達に自分の思いや考えを伝えようとする			
子どもの姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>先週は木曜日まで実習生による指導だった。実習生との関わりを喜びながら雪組は室内で制作やごっこ遊び、星組は戸外で虫とりや鬼ごっこが盛り上がりつつあった。一方で、したい遊びのイメージをもっていても自分で実現することが難しく遊び込めない子の姿もあった。</li> <li>気の合う友達と関わる中で思いの違ひから言い合いになったり仲間に入れない様子も出てきており、友達関係が揺れている。</li> </ul>	ねらい・内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の好きな遊びや気の合う友達を見つけて楽しむ</li> <li>友達と話をしたり一緒に遊んだりして楽しむ</li> <li>自分のしたいことや困っていることを友達に伝えようとする</li> <li>運動会に期待をもち楽しく活動する</li> <li>体をのびのび動かして遊んだり、競技やリズムに参加したりする</li> <li>みんなで一緒に活動することの楽しさを味わう</li> </ul>			
●環境構成 ○保育者の援助	<p>【遊び】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●制作では、様々な材料を組み合わせて作っている。必要に応じて新しい素材(ガムテープ、スズランテープ、カラーセロハンなど)を出し、イメージを膨らませながら作ることができるようにする。</li> <li>○広場では2クラスが混ざり増やし鬼やドロケイをしている。ドロケイは、ルールの理解に個人差があるため、教師が確認しながら一緒に遊び、みんなでルールのある遊びをすることの楽しさを味わえるようにしていく。</li> <li>○友達とやりたい遊びが合わない、仲間に入れてくれないなど、遊びの中のトラブルが増えてきている。思いが表せず我慢している子もいるため、遊びの様子を見ながら、思いを聞いたり、互いに伝え合えるよう仲介したりし、互いの思いに気が付けるようにしていく。</li> <li>●運動会の練習などで、園内がいつもとは違う雰囲気になってくる。好きな遊びに取り組み時間ができるだけ多くとれるように流れを考え、子どもたちが自分の好きな遊びにも満足感をもって過ごせるようにする。</li> </ul>	<p>【運動会に向けて】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○戸外で体を動かす心地よさが感じられるよう、みんなでリズムを踊ったり、走ったりする時間を設け、運動会に期待感をもてるようにする。2クラス一緒に取り組むリズムやかけっこなどで一体感をもち、学年としての育ちにつながるようにする。</li> <li>●用具の確認等を丁寧に行い、一人一人が安心して取り組みることができるようにする。</li> <li>○ダンスで使うマラカスはコーナーを設定し、好きな色のミラーテープを貼ったり、ビニールテープで飾り付けたりしてオリジナルのものを作れるようにする。作ったマラカスはすぐに使えるようにかごなどに入れて出しておき、遊びの中でもリズムを楽しめるようにする。</li> <li>○玉入れは遊びの中でも取り組めるようにし、ねらって投げる楽しさや玉が入った時の嬉しさを感じられるようにする。</li> </ul> <p>【生活】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○緊急事態宣言が解除となり、弁当が始まる。久しぶりの昼食となるため、手順を確認しながら準備を進めていく。友達と一緒に楽しい雰囲気の中で昼食が取れるようにする。</li> </ul>	<p>【行事】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○運動会 9日(土)</li> <li>・いつもと違う雰囲気や不安になったり興奮したりすることが予想される。困ったことがあったら、近くの先生に言うように伝え、安心して参加することができるようにする。</li> <li>・登園したら、必ずトイレに行く。水筒を席に置き、天候を見て水分補給をする。</li> <li>・のびのびと参加できるように、明るく声を掛けたりがんばりを認めたりしていく。</li> <li>・今年は新型コロナウイルスの影響により、短時間で4つの種目を行う。速やかに移動したり用意ができるよう、教師や実習生が連携し、子どもたちは落ち着いて表現したり体を動かしたりすることができるようにする。</li> </ul> <p>○学級保護者会 4日(月)雪 9:30～ 星 12:30～ (台風接近のため1日から延期)</p> <p>リズム「タッタ」「ハイタッチ」</p>			
	4日(月)	5日(火)	6日(水)	7日(木)	8日(金)	9日(土)
流れ	9:00～9:15 登園 10:35 片付け 10:50 玉入れ ※昼食を食べ終わった子から、ダンスに使うマラカスを作る 13:15～13:30 降園	9:30 リズム 10:50 片付け 昼食 12:15 片付け 12:30 障害物かけっこ	9:30 リズム 10:40 片付け 11:15～30 降園	9:30 リズム	※カラー帽子持ち帰り	運動会 9:00～9:45
進	雪降園時間変更 弁当開始	明日：諸費用納入	明日：運動会準備のため半日保育		明日運動会、水筒・保護者の名札・健康チェック忘れずに	お土産(ぼっくりとノート) 11日代休、12日衣替え

当日、子どもたちは運動会を楽しみに保護者と表情良く登園してきた。保護者が見ていることで張り切る子がいる一方で少し緊張した表情を見せる子もいたが、全員がすべての競技や演技に参加した。正味30分程度と短い時間ではあったが、子どもたちがそれぞれ自分なりのめあてをもって走ったり表現したり、親子でふれあいながら玉入れやダンスをしたりと、アットホームな雰囲気の中、親子で一緒に楽しむ運動会となった。

### ダンス — 当日は道半ば —

- D: 振り付けは単純で繰り返しも多かったし、ちょうどよかったんじゃないかな。考えなくちゃとか、ちゃんとやらなきゃではなく、負担なく楽しんで終われる。
- B: 今は「もう先生は踊らなくてもできる」って、繰り返し踊ってる。
- C: この日(運動会当日)ある程度形になってる、でも、まだ途中。
- D: 終わった後に楽しく踊る姿が見られると、「成功だね」って思えるよね。
- E: それが理想だよ。この日を境に2度とやらない、じゃなくてね。

2021.10.20 ビデオカンファレンスより

次頁より、ダンスに苦手意識をもっていた幼児に焦点をあてた事例を考察する。

**ユウジについて**

普段からリズムや手遊びには乗り気でないことが多い。前年度の運動会ダンスでは、場にはいたものの踊らずに立ち尽くしていた。4歳児になり、保育の中でゲーム的要素のあるダンスに友達と一緒に笑顔で取り組む姿が見られるようになったが、振り付けにかわいい仕草があるものや女声の曲などは「これは女の子のでしょー」などと言い、参加しないことが多かった。

今年度の運動会でダンスを踊るにあたり、担任は、ユウジが自分なりにのびのび踊る姿がみたいという願いをもった。

**9/22(水) 9月誕生会**

お楽しみの合奏で見た手作り楽器に興味をもち、どんぐりマラカス(小さなペットボトルにどんぐりを入れたもの)を作り始めたユウジ。空き箱で作った自作の武器の中にもどんぐりを入れマラカスにすると両手に持ち、鳴らして楽しんでいる。それぞれの音の違いに気付き、「ちょっと聞いてて」と、担任にも見せに来る。ステージで演奏している友達の仲間に入り、体を自由に動かしながら楽器を演奏して楽しむ。

すごく楽しそうにマラカスで遊んでるー!意外!!



マラカス作りに自ら取り組み音の違いなどにも興味をもって見せに来たユウジの姿から、“音の出るものを持つことで、ユウジも興味をもって取り組むのではないか”“普段の様子から、曲の雰囲気は中性的でノリの良いものが良いだろう”と考え、学年での話し合いに持ち寄った(p17 参照)。

**10/1(金) 降園時の活動で…**

みんなで担任の動きを真似ながら踊る。女兒中心に喜んで踊っている子が多かったが、ユウジやリュウ、ヒロキらは踊らずに座って見ている。ミラーテープを付けたどんぐりマラカスを見せ、自分たちで作って持ってきたことを伝え、「僕も作る」「全部キンキラにしたい」などの声が聞かれる。ユウジも「僕はいろんな色を付ける」と言う。

やっぱり踊らないよね。でもどんぐりマラカスへの反応は上々!  
作りたいという気持ちをもてたことが第一歩。

**10/4(月) どんぐりマラカス作り**

どんぐりマラカス作りのコーナーを設定し昼食を終えた子から作り始める。作ったマラカスを持ってステージへ行き、曲に合わせて音を鳴らしたり、自由に踊ったりする子もいる。ユウジは、自分から作りに来るが、作り終わるとマラカスは置いて戸外遊びに向かう。降園時にリズムの曲を流すと、踊り始める友達に混ざり、ユウジも笑顔で参加する。サビ部分のみマラカスを鳴らして踊っている。

マラカス作っただけで終わってしまったのはちょっと残念。  
でも、降園時の様子は、なかなかいい!



## 10/6(水) 突然に…

片付けから降園活動に移る合間の時間に、ユウジが担任のところに来て話す。

ユウジ「踊るのキライなんだよね」

担任「…そっかー。でも、ユウジくん、忍者のダンスとっても上手に踊ってるじゃない？」

ユウジ「うん」

担任「タツタ(運動会で踊る曲)も踊れるんじゃないかなあ。

ユウジ「んー、でも嫌。玉入れとかかけこは良いけどね」

担任「そうかー…」



ずいぶんダイレクトに伝えに来たなあ。恥ずかしさや苦手意識からなのかな。忍者のダンスは楽しんで踊っていたから、認めることで自信や意欲につながるかなと思ったけれど、だめかあ…。



## その時の対応って…

B: ユウジの性格を考えて、これ以上言ったら踊らなくなっちゃうだろうとか、突っ込んで聞いても返事は返ってこないだろうと思って、「何が嫌？」って聞かなかった。けれど、「踊るのやなんだよね」って言える関係性になっていたと思うと、聞いてみたら答えたのかもしれない。触れないほうが良いと思った自分の判断はどうだったかな…。

G: 5歳児だと、聞いたら答えられるかなと思うけど、4歳児ってあえて突き詰めて聞いてしまうと話さなくなったりやらなくなったりするよね。子どもの気持ちの中に入って行くのって勇気がいる。どっちに転ぶかわからなくて。

B: 反応の良かったマラカスを取り入れたり上手だねって乗せたりして、「やれるかも！」っていう気持ちにもっていけるかな、と思ったけど、一筋縄ではいかなかった。

G: プレッシャーになると益々やらなくなるんだよね。

B: 保育室で踊っている時も、担任と目が合うと踊らなくなっちゃうことがあったので、恥ずかしいのか大人の目が気になるのか…

E: 4歳ぐらいが一番難しいね。5歳はその恥ずかしさを超えていく。恥ずかしがってるほうが恥ずかしいって。

あと、言いに来たことに対して、どう返すか…。選択肢がたくさんあって、その場でこれがいいって思って答えるけど、後から考えると、どうだったかなっていうこともあるよね。

B: そう。「上手に踊ってる」というのもプレッシャーになったかな…。この時の返答はこれじゃなかったかもしれない。

A: 楽しいよ、上手だよ、だけじゃなく、「踊るの嫌なんだよね」という気持ちに共感的な対応があっても良かったね。

E: 「上手に踊らなきゃ」と思うと踊れなくなったり楽しくなくなったりする子もいるよね。

C: 私だったら、すぐにどうして踊りが嫌なのかを聞いていたかもしれないな。

B: 前の姿を知ってたからできなかったんだよね。毎日見ていたから彼なりの成長を感じていたし。表に出づらい、形に見えない成長が捉えられるのは良さでもあるとは思うんだけど、周りからみたらそうは見えなかったかもしれない。こうやって振り返ることで気づくことってあるね。

E: こういう振り返りをすることで、また次に会う誰かへの援助の選択に影響があったりするんだよね。

G: 先生を育てる子だね。

2021.12.23 カンファレンスより

## 10/9(土) 運動会当日

元気に登園。障害物かけこや玉入れには張り切って参加する。ダンスは、隊形移動はするものの踊りはわずかに手を振るのみであった。

うーん。練習の時よりも動いていなかったな。私の願っていた“自分なりにのびのび踊る”という姿は見るのができなかったけれど、全く動かなかった3歳児の時に比べれば成長した姿って見えるのかな…



## 10/19(火) 集会室でみんなと一緒に

昼食後、体を動かして遊び最後にみんなで踊りを踊る。「しゅりけんにんじゃ(以前からユウジも踊っていた曲)」を踊った後、「タッタ」の曲をかける。周囲の友達と同じテンションでユウジも踊っている。最初から最後まで笑顔で踊りきった。



おお!踊ってる!!しかもすごくいい笑顔!!!本番が終わってから表情が良くなる子どもたちの姿はこれまでも見たことがあるけれど、こんなに変わるとは…。



本番の緊張から解き放たれたからなのか、場の雰囲気に乗せられたのか、本当に良い表情が見られた。運動会当日の姿とは全く違った姿だったため、保護者にも伝えると、本人は、「もう踊りがわかったから踊れる」と言っていたとのことだった。

### さじ加減が難しい

E:「もうわかったから踊れる」って言っているところがね。

B:振りをかなり簡単にしたつもりだったから、繰り返し踊っていればできるだろうと思ったけど… その先は個別対応が良かったのかもしれない。不安なところを個別で一緒にやってみる、そういう手立てもありだったかな。

D:先生は、練習感を出したくなかったんだろうけど、ユウジには、不安だったのかもしれないね。

C:運動会までもう何日かあったら、学年全体では先生がいなくても踊れるということまでいけてたと思う。ユウジも踊れる、と思えていたかもしれない。

B:さじ加減が難しいな。

G:予行をやらなかったけど、他学年にお客さんになってもらって反応をもらえるとまた違ったかもね。

E:見てもらってやっと自覚するところもあるよね。

C:自信や意識をもつという意味で、中間地点として予行のようにしてみんなで見合うことができたならよかったね。

2021.12.23 カンファレンスより

3歳児から持ち上がりであった担任は、昨年の姿と比較し、運動会当日の動きは小さくとも彼なりの踊り方で参加するユウジの姿に成長を感じていた。しかし、持ち上がりでなかったらどうだっただろうか。もっとのびのび楽しく踊る姿がみたいと願い、「踊るの嫌いなんだよね」の発言の裏にどんな気持ちがあるのかをもっと掘り下げたり個別に声掛けし一緒に踊ったりなど、あれこれと手立てを考えていたのではないかと思う。

ユウジのこれまでの様子から、あえて突き詰めて聞いてしまうと話さなくなったりやらなくなったりしてしまうのではという思いもあった。しかし、振り返ってみると、この状況であったならば、もう一段階先の姿を期待して、もっとユウジの気持ちに迫ってみてもよかったのだと感じる。



## 今後に期待!

- B:ユウジは、踊ること自体が嫌いなわけではないと思うんだよね。だから年長さんみたいに、自分で選んだ曲、考えた踊りならやるんじゃないかなと思う。4歳児には難しいけれど、年長になった来年はどうか。
- E:来年の運動会がどうなるかはその時の子ども達と担任次第だけれど、このところ自分たちが考えた踊りとみんなが考えた踊りの両方を踊っているからね。
- B:当事者感が違うよね。決める段階に自分がいることが大事と思う。
- D:年中で先生が強制して拒否感を強くして終わってしまうと、年長になってからの意欲が低くなってしまふんじゃないかな。(後日)楽しく踊っている姿が見られたっていうのは、年長につながっていくと思う。来年が楽しみ。
- B:でも、強く誘ってやる子もいるからね。それで楽しさに気付くっていうこともある。そこが難しいな。ただ強制や義務みたいなになると教師も嫌になってくる。今回は教師に「踊らせなくては」という思いはなかったから余裕はもてたかな。
- G:踊らない子もいることが受け止められる環境は大事。先生がきりきりして怖くなると子どもは読み取るからね。
- D:その子たちのレベルにあったことを求めているかっていうのもね。  
「運動会=楽しいもの」と感じて欲しいという教師の意図に戻るね。「楽しい」がどういふものかは年齢や教育課程によって求めているものが変わるけれど。

2021.12.23 カンファレンスより

## まとめ

「運動会」のイメージが教師それぞれであることがわかった1回目のカンファレンス(p5~)から、担任は、「運動会」を経験したことがある4歳児も、すでにその子なりの運動会のイメージがあるだろうと考えた。そして、もしネガティブなイメージをもっている子がいたとしても、「運動会は楽しいもの」というイメージがもてるようにと願い、「楽しさ」を軸として、運動会に向けた取組を進めていくことにした。

子ども達が楽しいと感じるには、活動が「やらされる」ものではなく自らが主体となり「やってみよう」と思い取り組めるものであることが必要である。運動会の内容を計画するにあたっては、子ども達の姿から興味を読み取り競技や演技の内容に取り入れることで、苦手意識をもっている子も「これならできるかもしれない」「やってみようかな」と思える活動となるようにした。その結果、マラカスをもちつことで消極的だったダンスにも取り組んでみようとするユウジのような姿を見ることができた。また、当日に向けて学年のみんなで活動を重ねる中で、「勝ちたい」とか「おうちのひとに見て欲しい」などの自分なりのめあてをもつようになり、4歳児なりにクラスで勝つために考えたことを伝える姿や、友達の姿に刺激をもらい苦手な活動にも取り組もうとする姿なども見られた。みんなで活動する中で自分なりのめあてをもちそれを実現することもまた「楽しさ」であり、主体的に取り組む姿に繋がっている。これらの経験が土台となり、5歳児になった時に、自分たちで運動会を作り上げていく姿へとつながっていくのだろう。今回の取組に限らず、教師が目の前の子ども達の姿を丁寧に読み取り興味に沿って無理のない活動を計画し、子ども達の言葉や行動から思いを汲み取りながら実践を行っていくことで、結果として子ども達が主体的に活動に取り組むこと、それが4歳児なりの「幼児と教師が共に主体」であると考えている。

今回、教師間で活動の計画の段階から、実践の中で大切にしたいことを共有できていたことで、迷うことがあってもその都度そこに立ち返り、話し合いながら進めていくことができた。カンファレンスを通して活動の軸となるものを共有しておくことは大切であると改めて感じた。また、個人の事例の検討では、カンファレンスをきっかけに、担任が自分の保育を振り返りその時の自分の気持ちや援助の妥当性について考えることで新たな気付きを得たり、同僚からの様々な意見をもらうことで新たな視点をもったりすることに繋がった。今回は事前と事後にカンファレンスを行ったが、翌日の援助に活かし、より子ども達の実態にあった活動を展開していくという面では、無理のない範囲で、活動期間中にカンファレンスを行うことも有効であると考えている。(関根映子・根橋杏美)

## 園歌で踊るって本当！？ 5歳児事例

運動会に向けた活動の中において5歳児は、自分の力を感じたり発揮したりするだけでなく、クラスやチームなど集団での種目が増え、友達と一緒に何かをしたり、勝敗を競いあったりすることが多くなる。教師もまた、協同的な姿を期待して、集団やチームを意識した援助が自然と多くなっていく。

カンファレンスにおいては、幼児と教師が共に主体となる保育を目指すには、年長という大きな集団の流れの中であっても、幼児一人一人が主体性をもって運動会に向かっていているのか、自分の力を発揮することを楽しんでいるのかなどを読み取り、個の思いを大切にすることを確認した。



例えばリレーは2グループに分かれて2回戦行っているけれど、5歳児は、自分がないグループであっても、同じクラスの子が勝つと喜んだり負けて悔しがったりする姿があるよね。それって、他の学年と比べても大きな成長だと思う。



運動会当日だけで感じられるものではないよね。だから実際は運動会に向かって活動していたとしても、経験が運動会後にも活かされるように、当日まで逆算して考えすぎずに、毎回の活動やその時々経験や感情を大切にしていきたいね。

更にカンファレンスでは、運動会当日だけではなく、運動会前後の活動の在り方をどうするか、保育者側の捉え方も重要であることを共有した。

ここ数年の本園の運動会では、5歳児は自分たちで競技順や表現の内容を決めている。他学年とは異なる5歳児ならではの取組についても話し合われた。



5歳児のダンスは、ここ数年子どもたちと一緒に考えて5~6曲構成になっていますよね。



こんなに何曲も使っている園はあんまりないんじゃないかな…笑



実際曲が増えることで保育者としての負担は大きいけど、一人一人の思いがそこで叶えられるからこそ全体での踊りにも気持ちが向いて、いい雰囲気になるんだよねえ~!(やめられない!!笑)



自分たちで決めた曲をグループごとに踊るから、お互いのグループを見合う機会もできて、それが互いを尊重することにもつながっているように思います。



例年の取組を見ている、一人一人の思いが叶ったり、何をするか子どもたちが考えたりして「自分事になる」って、とっても大切なんだなって思います。

運動会に限らず行事において5歳児は、個人よりも学年全体としての姿が評価されがちである。しかし、集団の中においても一人一人が好きなきことに取り組み輝いてほしいという願いを教師はもっている。一人一人が「自分の願いがかなった」と感じることは、行事への参加意欲やみんなでの活動そのものを楽しむことにもつながるだろう。「幼児と教師が共に主体となる保育」を目指し、子どもたちの声を聴き、相談しながら運動会に向けて活動していきたいと考えた。



## 長期指導計画

期の始まりに担任間で相談しながらねらい等を確認し、長期指導計画を作成した。以下の表は、長期指導計画の中から運動会のある5歳児Ⅲ期のねらいと、運動会に関連する教師の援助を抜粋したものである。

### 5歳児Ⅲ期 ねらい

うごく	かんじる	かんがえる
共通のめあてに向かう中で、クラスや学年の友達と体を動かして遊ぶことを楽しむ	友達と一緒に遊びや生活を進める中で、自分のよさや友達のよさに気付く	いろいろな友達の考えにふれて、自分なりの考えを深める
<b>【運動会】</b> ○ ●クラスや学年の友達と一緒に体を動かして遊ぶ時間を継続的に設定し、体を動かすことの心地よさや、競い合うことの楽しさなどを感じられるようにする ○ 共通のめあてに向かって友達と一緒に活動する中であっても、一人一人の子どもの取り組み方を大切にしている。	○ チームに分かれて競うこと、学年で一緒に取り組むことなどを通して、クラスや学年の友だちと関わりながら、それぞれの良さに気付く機会となるようにする。 ○ 衣装・小道具の制作やリズムの振り付けなどでは、これまでの経験を活かしながら様々な方法で表現することを楽しくめるようにする。	○ それぞれが自分なりの思いをもって取り組んでいる姿を十分に認めていく。互いの良い所や取り組みを認め合いながら共通のめあてに向かって取り組むことの楽しさを感じられるようにする。 ○ 自分が取り組みたいことを考えたり、みんなで一緒に取り組む中で自分の力を発揮したりできるようにする。

## 短期指導計画

期のねらいを念頭に置きながら担任間で相談し、週ごとに幼児たちの実態を踏まえて週案を作成した。運動会を土曜日に控えた10月2週の週案では、以下のようにねらいと内容を設定した。

ねらい	めあてに向かって友達と一緒に遊びや生活を進める
内容	・運動会に向けた活動に友達と一緒に意欲的に取り組む ・友達と一緒に力を合わせる楽しさを感じ、運動会に期待をもつ ・友達に自分の思いや考えを伝えたり、相手の話を聞いたりする ・のびのびと体を動かして遊ぶ

### 事例1 種目を決める —ダンスは出てこないんだね—

9月10日(金)

学年で集会室に集まり、運動会でやりたいことはどんなことか子どもたちに尋ねた。自由に発言する中では様々な意見が出され、去年の運動会の経験から「玉入れ」「障害物競走」や、年長になってから繰り返し楽しんできた「リレー」が挙げられた。その他に「ドッジボール」「鬼ごっこ」などの遊びの中で展開されているものや、「大玉転がし」「しっぽとり」「どんぐり集め競争」などの意見が出された。担任からは「綱引き」「綱とり」を提案し、それぞれの種目をやってみてから決めようということになった。出された種目を一通り試したのち、多数決(1人4枚のシールをやりたい種目のところに貼る)で、上位3種目に決定した。

子どもたちから「ダンス」は出てこなかった。担任たちは「どうしてだろうね…」「忘れていたような気がするよね…」と話し合い、子どもたちからはクラス対抗の種目ばかりが提案されていたこともあり「みんなで取り組みたいこと」として、全体場でダンスを提案することにした。子どもたちは「あ、ダンスいいね」「みんなで踊りたい」など思い出したかのように教師の提案を受け止めていた。子どもたちの賛同を得て全4種目となった。



話し合いにおいて教師は、子どもたちが自由に意見を出せるような雰囲気づくりを心掛けた。子どもから出された意見を一度はきちんと受け入れる等である。また子どもたちは、それまで見聞きしたことや経験をもとに考えを表すため、子どもから出される意見には限りがある。教師は子どもから出ないような意見をいくつか挙げ、子どもの選択の幅を広げる役割を担った。

ダンスは教師から「やろうよ」と提案した。競い合うものばかりでなく、音に合わせて身体をのびやかに動かすこと、自分なりの表現を楽しむこと、グループや学級・学年が一つになる楽しさを感じることもできたという願いからであった。

### 教師から提案する、ということ

C:先生たちが「やろうよ」と抜き出した種目はリレーじゃなくて、リズムにしたんですね!

D:そう、子どもたちから出されたものが、全部、月組対空組で競うものだったから、そうじゃなくて「年長さんみんなでやろうよ」というものが欲しくて、リズムにしたの。教師たちから提案したら、子どもたちも「うんそうだね」と納得して…。

E:そうそう、そこで、「じゃあ内容はみんなに任せるよ」と決めていったんだ。

F:どこまで先生の意見を入れるかって迷うよね…

F:先生からの提案だったかもしれないけど、子どもたちからしたら自分たちで決めたことだからすごい納得して取り組んでいるし、楽しいし…教師側から提案しているけれど、子どもたちの気持ちをたくさん考えているからね。

E:子どもの満足度って、子どもたち自身が話し合いを経て“納得”して決めているから得られるのかもしれないね。

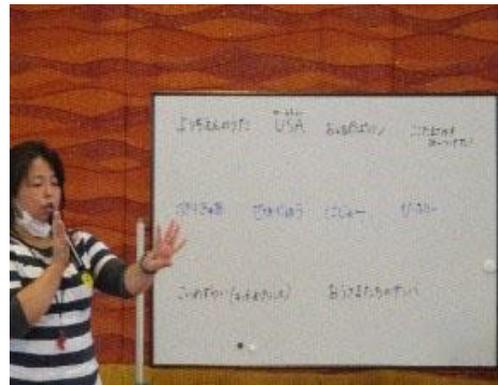
2021.10.27 カンファレンスより

### 事例2 踊る曲は何にする? —え…園歌…?—

9月27日(金)

ダンスで使用する曲については、子どもたちから40曲近い候補曲が挙げられた。その中には、流行りの曲やヒーローの曲のほかに、園歌があげられた。教師たちは「え…園歌…?」と考えたが、一旦受け入れ、ホワイトボードに記した。

その後、試しに曲を聴いてみたり、子ども同士で意見を参考にし合ったりしながら多数決を繰り返し、最終的に5曲に絞った。最後はどの曲で踊りたいと考えているか、自分の名前が書かれたマグネットを使用して意思を示した。踊りたい人がいなかった1曲をのぞいた4曲となり、園歌も10名程度の子がやりたいと考える人気曲であった。それぞれ、その曲を選んだ仲間と振付を考えることとした。



### 事例3 園歌に振りを付ける —こういうのはどう?—

9月29日(金)

「園歌」を選んだ子どもたちのグループでは、「試しにやってみようか」と教師がピアノを弾きだすと、それぞれが体を動かしたり、ハミングをし始めたりした。2度ほど曲を弾くと、自由に踊りはするものの、振付を考え決めることは難しいようだったので、教師はホワイトボードに歌詞を書きながら一緒に確認した。「“リンリンリン”のところは、こうするのはどう?」とクミが手を電話のポーズ(親指と小指を立てる)にして耳元で揺らすと、「あー!それいい!!」と他の子どもたちが真似をする。「じゃあ次はこう」と1人が動くと他の子どもたちがそれを受け入れ、また真似をして振付が決まっていく。

歌詞の中に“大学通りのまがりかど”という言葉が出てくると、どう表現しようか悩み始めた。「跳ぶ?」「まわる?」と意見は出たが、皆が納得できずに動きが止まってしまった。それまでスムーズに決まってきたものが決まらず、しばらく沈黙の状態となった。教師は「何がいいかな〜?」と言葉にしながらも、新たな振りを提案しようかどうしようかと迷っていた。だんだんと集中が切れ、注意がそれる子も出てきた。教師がそろそろ皆での話し合いは限界かと感じた時、1匹のチョウが部屋に入り込んできた。「あ!チョウチョ!」とオルが声を上げると、皆が一斉にそちらを向く。するとミオが「ねえ、こういうのはどう?」とチョウが羽ばたくような動き(手を伸ばして上下に揺らす)をした。」するとたくさんの子が、「いいね〜!」といい、再び振付が進み出した。「幼稚園のことが大好きって、抱きしめるポーズも入れたらいいんじゃない」と言うランの提案もグループで受け入れられ、ダンスが完成した。



コロナ禍により園歌を歌った経験がほとんどない幼児たちが、運動会で踊りたい曲の候補として園歌を挙げ、実際多くの子が踊りたい曲として選択したことに、教師は戸惑った。園歌はそもそも踊っていいものなのか、テンポが速くない園歌はダンスには向かないのではないかと感じたからである。管理職や他学年の教師にも相談し、やってみたらいいのではと背中を押してもらった。

グループで集まり「とりあえず、やってみよう！」と教師がピアノを弾くと、幼児たちは自由に体を動かし始めた。こういう曲はダンスに向かないだろうというのは、教師の思い込みだったのだ。幼児は実際に動いたり、具体的に言葉に表したりしながら仲間と動きや考えを共有し、振付を進めていった。教師はピアノを弾く、ホワイトボードに歌詞を書いて読み上げるなどしながら活動を支えていった。

途中で振り付けが停滞した場面では、教師は援助するべきかどうか迷った。幼児の主体性を大事にしたいという思いがあるからこそ、教師は自分の考えを伝えるタイミングに悩む。その姿も教師の主体の表れであるといえる。

### 園歌を踊るって!?

H:園歌は子どもたちから出てきた案なの?

E:そう、なんなら人気な方だった(笑)

B:曲や踊りを自分たちで決めるってすごいよね!

A:曲調から好みでわかれているから、結果グループごとの子どものタイプも似てくる。カラーが出るし自分の好きなものを選べるから踊れる。

D:幼稚園の歌は振りが全然ないけど…そもそも(コロナ禍で)歌っていないので、園歌をホワイトボードに書いて、何回も曲を弾きながら考えていった。蝶々が飛んだのを見て蝶々の振りにするとか、幼稚園を大好きってことでハグの振りにするとか。満面の笑みで歌いながら踊る子も中にはいた。振り付け途中には、友達の意見に対してそんなのはイヤとか言う子もいたが、蝶々の意見が受け入れられたことで、他の意見も受け入れられるようになった。

F:幼稚園の歌で踊ろうなんて思ったことない。本当に子どもの意見って毎年何が出てくるか分からないね。

D:グループごとのダンスを紹介するときに、「『幼稚園のうた』は手をチョウのようにパタパタしたりするところがあります。楽しく見てください」って言ったんだ。その時思い入れがあるんだなって思ってたうれしかった!

2021.10.27 カンファレンスより



### 事例4 プログラム順を決める —子どもたちの思いは?— 10月7日(木)~

運動会で行う4種目(しっぽとり、玉入れ、リレー、ダンス)の取り組む順番について、子どもたちと話し合った。順番を決めると言っても難しいだろうと考え、まずは「運動会の一番最後にしたい種目は何か」という質問をした。教師たちの予想通り、子どもの意見はリレーとダンスに偏り、そのどちらかの二択となった。翌日決めるから、どちらがいいか考えておいてね、と声をかけた。

翌日、子どもたちにどうしてその種目を最後に行いたいのか尋ねた。「最後はリレーがいい」と答えた子どもたちからは、「楽しいから」「おもしろいから」「盛り上がるから」などの理由が出された。「最後はダンスがいい」と答えた子どもたちからは、「楽しいから」「最後はみんなでやるのがいいから」などの理由が出された。意見が出尽くしたところで考える時間を少し設け、多数決で決めることにした。リレーとダンスどちらも同じくらい手が挙がったが、僅差で最後の種目はダンスとなった。

教師は、子どもたちと一緒に種目順を決めたいと考えていた。

2020年度(この事例の前年度)もコロナ禍の中での運動会であり、学年別に開催された。前年度の年長児は運動会の最後はダンスで締めくくった。「最後はみんなで取り組むものがいい」というある幼児の意見に多くの子どもが賛成したからである。

今年の年長児たちは、前年度の年長児の運動会を見ていない。今年の年長児たちは、自分達の運動会をどういうものにしたいと考えているのだろうか。種目順を決めながら、そういった思いを聞き出していきたいと思ったからである。

今年度の運動会も、最後の種目はダンスになった。当日、子どもたちは自信に満ちた表情でリズムに乗り、踊ることを楽しんだ。グループ別に発表した前半4曲では、自分の出番を今か今かと待ち、音楽に合わせて飛び出してきたり、自分の出番でないときも手拍子したりするなど楽しむ姿が見られた。また、最後に全員で踊ることにした曲では、「イエーイ！」という掛け声を思い切りしたり、友達と顔を見合わせながら取り組んだりする姿が見られた。



### プログラム順について

D: 4種目のうち、最後はリレーではなく、ダンスで終わりたいというのが、子どもの気持ちだったんだよね。

B: 何も考えずに、リレーは運動会の競技の中で最後ってイメージがあるけれど…

E: 子どもたちに、どうしてダンスが最後がいいと思うのか、どうしてリレーがいいと思うのか、のあたりも聞いたんだ。そうしたら、子どもたちの中から、勝ち負けの思いで終わるのではなくて、楽しい気持ちで終わりたいって…

A: 去年もそうだったよね。

E: でも今年はそこそこ、リレーが最後がいいよ、という気持ちの子もいた。でも、他の2種目の「しっぽとりがいい」「玉入れがいい」という子は少なかった。今までたくさん取り組んできたリレーなのか、みんなで踊るダンスなのか、といふ2択ではあったのかなという感じ。去年は学年ごとの開催だったから、ある意味、そういう「去年はこうだった」という影響を受けずに、決めることができているのかもしれないね。

2021.10.27 カンファレンスより

## 事例5 運動会を終えて 一どンドン集まってくる子どもたちー 10月12日(火)～

好きな遊びの中で、子どもたちが運動会の曲を再現して踊れるように、各学年で取り組んだ曲をプレイヤーに設定しておいた。年長のダンスメドレーが流れ始めると、音楽につられて子どもたちが集まってくる。教師たちも一緒になって踊る。すぐにステージは子どもでいっぱいとなり、ひきつけられた他学年も混じりながら、ダンスを楽しむ姿が見られた。「イエーイ！」と声を出すところでは、子どもたちの大きな声がそろい、踊ることを楽しんだ。



年長全員がいたのではないかと思うほど、多くの子が集まり踊り出した。子どもたちは自分の出番ではなかった曲も、ほぼ全ての振付を覚えており、楽しそうに笑顔で踊っていた。他学年の子どもたちも年長担任たちも思わずステージに近づき、一緒に踊ることを楽しんだ。心地良い時間だった。



全員で踊る最後の曲、「イエーイ!」って声がすごい大きかったねー!



声出すって大事だよ。本当に気持ちよかった!自分の出番以外の踊りも踊っていたよね!



運動会后、この遊びの場面でも、誕生会のお楽しみでも踊ったけれど、自分のグループ以外の踊りも踊っていいとわかるとはほぼ全員が出てきていた。こうした姿を見ると、運動会の日が到達点で終わりではないと改めて思ったし、保育の中でこういう姿が見られて安心した。運動会の評価は当日ではなくて、こういった姿が保育に出たことで評価できるんじゃないかな?



「子どもと決める」ということを、ここまでやるかって思った!話し合い、決める土壌はここ数年でつくられてきていて、教師側も大分受け入れ態勢ができてきているよね。



改めて園歌で踊るとはびっくり!担任の先生は戸惑ったかもしれないけど、それを乗り越えて、子どもの思いをどうにか実現できるようにすることは大切だよ!



園歌って編集していいのかな?と正直迷ったよ…。(笑)



そういうふうにしていいものなのか悩んだって言っていたけれど、子どもから出た意見を受けて、どうしようって教師たちが一緒に考えられるような園の在り方って大事だと思う。



第三者から見ると「え?そんなこともやっちゃうの?」と思う取り組みだったのかもしれない…ここまで来るには3歳から対話的に保育をするという積み上げが大切だね。「年長になったから話し合う活動をしよう」というだけではないよね。これからも子どもの主体を大切にしたいね!



## 自由でも、揃えても・・・

- D：ダンスの曲は「リズム感があって」とか、「気持ちよく揃って」とか、「技術的なねらいももったほうが良いのか」とも思ったけれど…正直、園歌は踊っていいのか迷ったな～！最終的には“自分たちで決めたものを自分たちでやる”とか、“やりがいをもっているかどうか”と考えて取り組んできた。みんな全身で踊る楽しさを感じられていたと思うし、後々、好きな遊びで踊りたいものになっている姿を見ると評価していいのかなと思う。
- E：選曲に関して言うと、子どもたちから出た意見全てはOKにしていない。教師の感覚として、歌詞の意味があまり良くないと思うものは、言葉を説明したりホワイトボードに書いたりしながら子どもに投げ、確認してきた。それは教師側の匙加減で、説得にかかってしまうところはあったよね。私はこう思うって言い方で教師の考えを伝えて…子どもたちもそれを聞いて考えてくれたらいいなって。
- B：流行りの曲などで、教師として受け入れるのが悩ましい時に、実際に受け入れるのか、園としてその曲を流して踊ることはどうなのか、そういうのも1個1個考えていくしかないのかなと思った。
- C：最近はいろんなメディア、家族の趣味も色濃く反映されていると思う。保護者もそういうのに抵抗のない世代になってきている。でも知っているかどうかは個人差もあるし、調整は難しいよね。
- A：保育者の感覚もそれぞれ違うかもしれないし。判断に迷うものは職員間でも相談していくしかない。
- E：みんなで踊る曲は教師側から出した。「最後にみんなで踊りたい」という意見あったが、候補の曲の中にみんなで踊るような曲がなくて、教師側で探して用意して、仲間の一員として提案したんだよね。
- D：そう！振り付けは簡単だけど、一体感が感じられるようなものにしたかったから、楽しんでいてよかった。グループごとの所は自分たちで作ったから、それぞれの特徴がよく出ていたよね。
- E：1つのグループの人数が多いから自分のアイデアがどこに活かしているかは微妙だけれど、保護者との面談の時に「自分(子ども)が意見を言ってこの振付になったと喜んでた」という話を聞いて、子どもたちにとって“自分が出したアイデアが活かしていると感じられている”のだとわかった。
- D：ダンスの振りを考える経験がない中でどう意見を出していくのだろうかと思ったけれど…自然と体を動かして決める姿やミュージックビデオの振りのままだりやる姿も見られた。じゃんけんをする振りを入れようとか、全然こっちが想像できないことを言ってきたりもして(笑)めっちゃくちゃだけれど、ホワイトボードに書いて意見を拾いあげながら繋げていったら意外といい振付ができて面白かった。
- H：途中後ろを向いて止まる振付があったけれど、そんな振付を楽しめるのは年長だと思った。
- F：いわゆる運動会だと、体の左右の向きを揃えとか、合わせて行進するとか、見栄えをきにしているものも多いけど、それをやっていたら運動会後に楽しむ姿が出てこなかったかもしれないね。これだけ、フリーに作っていくと、どうやってまとめていくのかと悩ましいけれど、ねらいをおさえれば援助の方向も見えてくる。子どもの中から何か出てくる。好きな踊りを自由にやるフリースタイルがあってもいい、みんなで揃えるところがあってもいい。どう子どもたちと作っていったのが大切だね。

2021.10.27 カンファレンスより



## まとめ

運動会に向けた活動の中で教師は、幼児に集団としての楽しさや喜びを味わってほしいと願うと同時に、その中で一人一人が運動会を自分のこととして捉え、様々な活動に参加してほしいと考えてきた。

運動会までの取り組みの中では、幼児と教師が対話的に“運動会そのもの”を作りあげていく過程が多く見られた。主体としての教師は、幼児一人一人が自分の意見を持ち、みんなの前で表すことをまず第一に考えた。そのための環境として、学年や学級で集まる機会を多く設けたり、幼児たちが思いや考えを表した際には一旦は聞いて受け止め、ホワイトボードなどを使用し共有できるようにした。また、子どもたちの中から出てこない視点や案を提案し、問いかけたり話し合ったりすることで選択肢を増やす役割も担った。

活動の中において「園歌を踊りたい」と子どもから意見が出た際、教師は踊ってもよいのか、ダンスに適さないのではないかと悩んだ。教師の考えをどういった形で子どもたちに表すべきなのか、迷うことも多くあったが、カンファレンスの中で、子どもの意見に乗ってみたら面白いのではないかと、ねらいが達成できるのであれば「園歌」でもよいのではないかと、というような言葉が出て、それに背中を押してもらった。教師同士の話し合いやカンファレンスにおいて、教師間の感覚や考えを互いに伝えあうことは、教師間のズレをすり合わせるためというよりもむしろ、新たな視点を獲得して新たな取り組みに挑戦するために必要であった。

主体としての幼児らは「話し合い」という方法をもって、めあてに向かってみんなで考えたり、実現に向けてアイデアを出し合ったりした。友達のいろいろな意見を聞いたり話し合ったりしていく中で、自分の考えと異なる相手の考えの良さに気付いたり、互いのイメージがつながる喜びを感じたりしながら、曲を決めたり振付を考えたりする楽しさを味わった。こうした姿からは、長期指導計画のねらい「共通のめあてに向かう中で、クラスや学年の友達と体を動かして遊ぶことを楽しむ」「友達と一緒に遊びや生活を進める中で、自分のよさや友達のよさに気づく」「いろいろな友達の考えに触れて、自分なりの考えを深める」が達成できたと考える。

より楽しい運動会になるために話し合う中では、種目を決める、曲を決める、振り付けを決める、など集団として意見をまとめ「決定」しなければならない場面があった。集団において目指す方向を決めていく際には、いつも全員の意見が通るわけではない。しかし自分の意見が決定までに何かしら関わっていると実感できるようにしたことで、子どもたちは自分の気持ちに折り合いをつけながら、集団としての決定に納得して取り組むことができているように思う。

運動会后、好きな遊びの中で運動会の活動が見られたことは、行事と遊びの境目がなくなり、行事そのものが子どものものとなった表れであると評価できるだろう。

5歳児の運動会に向けた取組は特に子どもと決定することが多いため、どのような子どもの姿が表れてほしいのか、どうしたら子どもの主体が発揮され、集団やグループとしての育ちにつながるのか等、カンファレンスを通して教師同士が対話し確認していくことが有効であった。様々な選択肢を共に検討しながら、この道筋でもたどり着けるだろうか、もっと良いやり方はないか、そもそも「良い」とは何か…と突き詰めて考える機会にもなった。

(井上郁)

## 研究のまとめ

幼児と教師が共に主体となる保育を目指し、本研究では特に教師の主体が色濃く出やすい「行事」、その中でも「運動会」に焦点をあて、教師間のカンファレンスを積み重ねてきた。子どもの成長に長期的な見直しをもちつつ、子どもを思い、子どもの実態に即して計画をたてる。その計画をもとに対話的であることを心がけて保育を実践し、その保育を振り返る。その営みの中で教師間のカンファレンスはどうかされ、教師たちにどのような変容をもたらしたかについて以下にまとめる。

### 教師間のカンファレンスがもたらしたもの

本研究では、教師同士が「運動会」についてざっくばらんに語り合うことから始めたが(p5~)、「運動会」に対する印象や考え、それまでの経験などは、一人一人異なっていた。一見、それぞれの印象や考えを話しているだけのものであっても、次第に同じ園の教師集団として、どのような子どもの姿を目指したいと思うのか、どのように子どもの姿を読み取ったらよいのか等の意見が交されるようになり、本園における運動会という行事そのものの在り方を、改めて考える機会となった。

運動会後には、ビデオカンファレンスを行った。同じ映像を見て振り返りながら、その時の教師としての思いや意図を再確認したり、良い取り組み方や方法は他になかったか、子どもにどんな姿が出ているか、その姿から何を読み取ったか、対話的な保育となっていたか等を検討したりすることができた。また、教師一人一人が自身の援助を振り返ったり、子どもの姿を捉え直したりする機会にもなった。

教師間のカンファレンスは園内研修などの改まった場だけではなく、週日案の計画時や保育中、保育後のおしゃべりなど様々な場面で行われている。どの場面においても、子どもの姿を中心に教師自身の言葉で語り合い、互いの意見を受容的に聞き合うことで、教師同士の対話がうまれ、自分だけでは気付かなかった子どもの捉え方や方法など、他の選択肢もあったことに気づくことができる。カンファレンスが深まると、出来事や保育の方法、幼児の姿など表層にあらわれることにとどまらず、その奥にある大切にしたいこと、譲れないと思っていることなどのような、それぞれの教師自身の教育観・保育観をおのずと語り合うようになる。そのことにより、それぞれの教師が自身の保育への考え方を揺さぶられたり、新たにしたりした。本研究のカンファレンスにおいても、教師が自分の保育を省みの中で教師自身に変容が見られ、より目指したい保育が明確になり、園における行事の在り方を再考することができた。

### 対話的な学びの視点から見る運動会の取組

右の図は、本園が作成・改訂してきた「対話的な学びに向かう幼児の姿と教師の援助の図」である(令和2年度 千葉大学教育学部附属幼稚園 研究紀要)。私たちは、保育計画の立案や、保育の評価・振り返りにこの図を活用している。好きな遊びに限らず、「行事」という取組の中においても、対話的な学びに向かう幼児の姿が表れていたのかを検討し、「対話的な保育」すなわち、幼児と教師が共に主体となる保育であったかについて併せて検討していきたい。なお、**文中太字**は図に示されている「対話的な学びに向かう幼児の姿」や「教師の援助」と同一のものである。

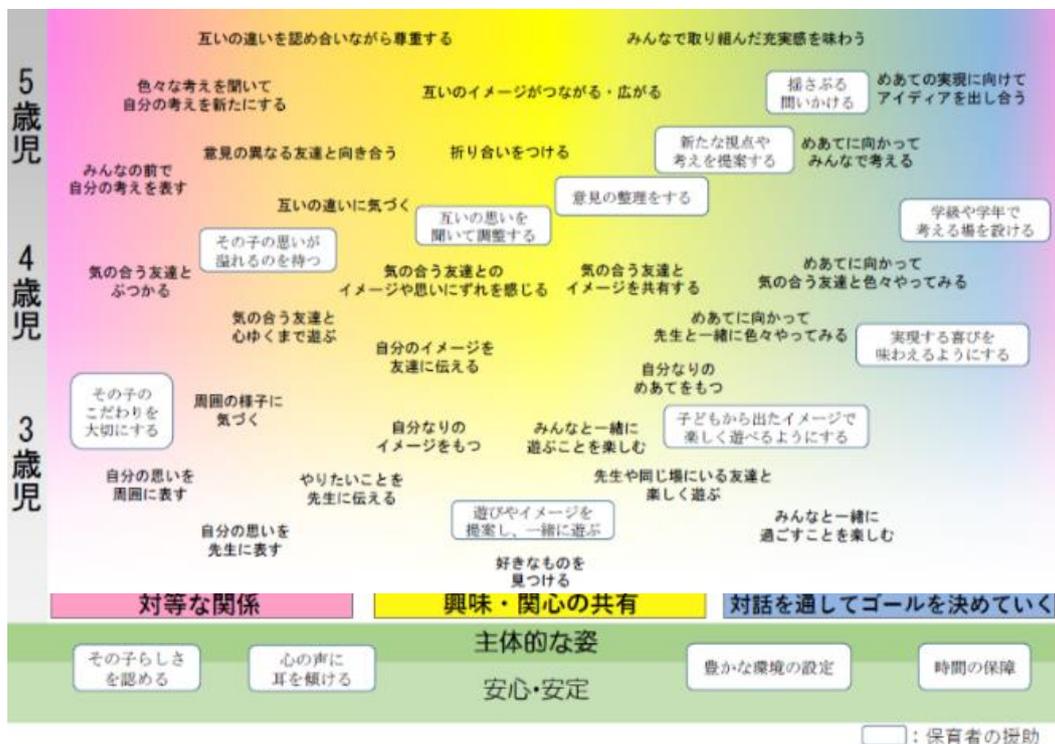
3歳児の取組では、ほとんどの幼児に「運動会」に対する特定のイメージや経験が無かったため、教師側から特別感を押し付けないように配慮した。日ごろの遊びの中で幼児から出てきたイメージや動きを教師が広げ、ダンスや種目として提案している。子どもたちは、過度な負担なく教師や友達と遊びや生活を楽しむ中で「運動会」という日を迎え、安心感のある中で「楽しかった」という印象で運動会を終えることができた。カンファレンスを経て、教師は自分の保育の特徴(得意や不得意等)に気づき、「子どもたちがなりきったりイメージをもったりしながらみんなと一緒に動くことを楽しむようには、自身の援助には工夫の余地があったように思う」と振り返った。



幼児一人一人に「運動会」の経験がある4歳児の取組では、それぞれの思いを大切にし、イメージや違いを受け止めながら、リズムや種目を決めていった。集団として楽しめる種目を入れつつも、その中で一人一人が自分なりのめあてをもって取り組めるようにダンスの曲や道具を工夫し、その子なりの実現する喜びを味わえる方法を模索した。カンファレンスを通して、幼児自身が「楽しかった」「自分たちで取り組んだ」と思えるようにしたいという教師同士の願いをすり合わせることができた。また、運動会後のカンファレンスで担任教師は自分の援助を振り返り、他の援助の仕方や子どもの姿の捉えもあったのではないかと考え、自分から積極的に他の教師の話聞いた。また行事当日の姿のみを評価するのではなく、行事の前後で一人一人のめあてが実現するタイミングを捉えていきたいということも確認できた。

5歳児の取組では学級や学年で考えながら、幼児と教師と一緒に運動会を作り上げていった。みんなの前で自分の考えを表すだけでなく、自分とは異なる意見とも向き合い、いい運動会にしたいというめあての実現に向けて話し合いを進めていく姿があった。集団で何か決める際、個人の意見がすべて反映されるわけではない。しかし進めていくためには、何か一つに決めていくことが必要な場面が多い。だからこそ教師は、何か決定をする際には、「自分の意見が何らかの形で反映され、結果に結びついた」と実感できるように工夫した。一人一人が納得できる形で進めることを心掛けた。

教師は意見を整理したり、新たな視点を提案したり、時に揺さぶったりしながら話し合いが進むように援助した。ここぞというタイミングでは、教師自身の思いや考えを表明することとした。幼児が主体を発揮しながら「運動会」を作り上げていくことを意識していても、幼児から出た意見に悩んだり戸惑ったりすることも多かった。そんな時、カンファレンスによって教師自身が大切にしたいポイントをじっくり考えることができたり、悩んでいる背中を押してもらって翌日以降の実践に臨んだりすることができた。教師自身が経験を積み積むほど凝り固まってしまうがちな「やり方」や「保育観」をリセットし、今、目の前にいる子どもたちと日々を作っていく大切さに改めて気付く機会になった。



対話的な学びに向かう幼児の姿と教師の援助の図  
(令和2年度 千葉大学教育学部附属幼稚園 研究紀要)

## 幼児と教師が共に主体となる保育

幼児と教師が共に主体となる保育において、両者の主体はどのように現れるのだろうか。

3歳児と4歳児では、教師が子どもの姿を読み取り、運動会を「楽しい」ものと感じてほしいと願いながら活動を提案したり、リードしたりしながら進めた。また5歳児においては、運動会に向けた話し合い等に参加することで次第に運動会を自分事として捉えるようになり、教師と対話しながら行事を作り上げた。どの年齢、どのような場面においても教師は、幼児が「楽しい」と感じながら活動に取り組むことが、その活動において幼児が主体を発揮することに繋がっていくと考え援助した。

教師の主体は、幼児の育ちを願い指導計画を立案する段階に限らず、保育実践中のあらゆる場面で「子どもの主体を発揮できるように」振る舞うという形で表れている。しかし、そういった子どもの主体の表れを受けた形のある意味「受動的」な教師の主体でなく、もっと教師の内側から「こうしてみたい」「こうしたらどうだろう」と湧き出てくる「能動的」な教師の主体の表し方について、さらに考える。

5歳児の運動会に向けた取組の中では、迷いながらも教師はたびたび自身の思いを子どもに伝えた。競い合う競技だけでなく、みんなで楽しめる種目もやりたいとダンスを提案したり、ダンスの候補曲のうち暴力的な歌詞があるものに対する抵抗感を正直に伝えたりするなどである。こういった場面で教師は、一方的な指示や制限をするのではなく、その理由や教師の思いを丁寧に説明するようにした。その上で「みんなはどう思うかな？」と意見を聞く機会も設け一緒に考えるようにした。

教師が主体として意見を表明することは、一方で子どもが主体として発する様々な意見を抑えこんでしまいかねない。いくら教師が幼児と対等であることを心掛け、対話をベースにして活動を進めていったとしても、である。伝えるタイミングは早すぎても遅すぎてもよくないと感じ、その塩梅がとても難しく悩ましい。そんな時にこそ、目指したい保育に向かう教師集団としてカンファレンスを行うことが助けとなる。教師同士も対話的な関係でいること、自分とは異なる見方・考え方を聞き、自分なりに解釈をしながら自分のものとして取り入れたり、異なる見方・考え方に焦点を当てることで互いの良さや強み、弱みを理解し合い助け合ったりしながら、保育実践を進めていくことが大切であると考え。

(井上郁・田中幸)





### < 研究 同 人 >

大和政秀	小林直実	田中 幸	関根映子
井上 郁	斎藤晶海	根橋杏美	酒井久美子
武藤記世子	朝井理香	高瀬由紀	古梶英恵

令和3年度 千葉大学教育学部附属幼稚園 研究紀要

幼児と教師が共に主体となる保育  
～教師間のカンファレンスから考える～  
(3年次)

令和4年7月

編集発行 千葉大学教育学部附属幼稚園  
〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33  
Tel: 043-251-9001  
URL: <http://kdg.e.chiba-u.jp/>

